句の修飾

三五三　句に對する修飾格は接續副詞、感動副詞等のなす職能にして句の意を豫示し又は之を誘導するものなり。

それらの例。

これまた都會の人の樂む樂みなり。

尤も雨が降つたらよいかもしれぬ。

あはれ此の身の齡十年若かりせば。

すは敵陣亂れ立ちたるぞ。

やよしばし待て。

名詞の用法

代名詞の本體

第三十六章　體言及び副詞の用法

三五四　名詞は呼格、主格、補格、賓格、連體格に立つをうべく、稀に修飾格に立つことあり。而してそれ助詞を伴ふを得。

三五五　國語の代名詞の本體は元來は「わ」「な」「か」「こ」「そ」「あ」「た」の如きものなりしが如し。この故にこれらより直に「は」「の」「が」などいふ助詞につづけて主語、連體語たらしむるをうるなり。

その例。

こは如何にとあきれたり。

そは實に余が先に見たるものなりき。

わが國　なが名（萬葉集にあり）　そが葉　たが袖

この木　その花　かの山　あの人　どの机

この事は古き用例を見ればよく知らるべし。卽ち、

あをなみたひまそ。

わになたえそね。

なこそはよのなが人。

こしよろし。

そをとるとさわくみ民も。

たにかもよらむ。

の如く此の形にて自由に用ゐられしなり。又これより直に名詞につづけて熟語をなすこともありき。

あぎみ（吾君）　わみ（我君）　なせ（汝兄）

かの場所又は方向の代名詞といふものは、實はこの時期の熟語にすぎず。

こ（場所）　こゝ　そこ　かしこ　いづこ　どこ

あそこ（「かしこ」「あそこ」は「そこ」に更に「か」「あ」を添へたるものなり）

ち（方向）　こち　そち　あち　いづち　どち

三五六　代名詞はその用法名詞と大略同じ。但し「ごとし」の資格及び、連體格に立つときは「か」に接するものと「の」に接するものとの別あり。

この項は代名詞が「如し」の賓格及び連體格たる時の形をとけるなり。卽ちこの場合には前項にいへる如く、

「わ」　「た」　は　「が」に
「こ」「そ」「か」「あ」「ど」は　「の」に

つづくるを常とす。その他の代名詞はかくの如く形を短くすることなくしてそのままにて「の」「が」に接す。そのうち又「が」に接するものと「の」に接するものとの區別あり。

「余」「汝」は「の」にも「が」に接す。

余が本　余の本　汝の物　汝がもの

「なに」「いづれ」及場所方向のものは皆「の」に接す。

いづこの人　こゝの山

「如し」の補語たるものも大體右の規定によれり。それらの例次の如し。

敵わが城を十重に圍みて蟻の通はんすきだに見えず。
わが兵糧は既に殆つきたり。
わが如く物や悲しきほとゝぎす。
汝の父は彼れの兄と朋友たり。
いづれの處なにの事なるかを知らず。

三五七　數詞の用法も略名詞に同じけれど、數詞の特有の用法としてその名詞に關して數量を示す方法あり。その方法は之を五樣に分つを得。

數詞特有の用法は數詞本來の特性たる數量を示す方法にして、これが名詞と相關する場合を見るに五樣あり。

第一は直に名詞の上に冠せられて合成語をなすものにして、

ナポレオン一世は身を陸軍の一將校より起せり。

第二は連體語として名詞の上にあることなり。

一合の小豆を播けば一升の小豆をうべし。

第三は名詞を連體語として數詞の上におくことなり。

かゝる時に友の四五人も來れば嬉しからむ。

次は單に名詞の下に置くものにして之に又二樣あり。第四は名詞に附屬する助詞ある時はその助詞をば數詞の下につくるものにして、

貧家五軒ありて此を買はんとする人五人あり。
一間には槍一本を畫き一間には鶴二十五羽を畫けり。

第五は助詞は直に名詞に附屬し、その下に數詞をおくなり。

我が鄕人は五人行きぬ。
鼠を三匹殺したり。

三五八　副詞は修飾格に立つを本來の用法とす。時としては連體格として用ゐらるゝことあり。

これらの事は副詞の條修飾格の條に既に述べたり。

名詞の修飾をなす副詞

三五九　副詞は又特別の名詞の修飾として立つことあり。この場合のものは主として程度の副詞とす。その例

唯半日の路ぞかし。

その所より稍東の方によりて見ゆるは筑波山なり。

述格　終止をなせるもの

第三十七章　用言の用法

三六〇　用言の各活用形はいづれも述格に立つことあり。そのうち終止をなすものは終止形を最普通とし、連體形、已然形は特別の場合に述格として終止し、命令形はそのまま終止し、連用形も亦陳述を中止して述格をなすことあり。

終止形の述格に立てるものは最も普通なるものにして今特に例をあぐるまでもなし。

連體形は上に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」ある時之に應じて述格に立つ。

御供に童子一人ぞ候ふめりし。

ここをなむ蘆屋の灘とはいひける。

かの翁の面にある瘡をや取るべき。

今年はいくつにかなれる。

又餘情を含めたる時この形にて述格に用ゐることあり。

くる秋ごとにそよとたふる。

述格を下に接續したるもの

わがたましひのなきここちする。

已然形は上に係助詞「こそ」のある時之に應じて述格となる。

今夜の月こそいと面白けれ。

涙のみこそ下に流るれ。

以上二の述格は文語にあるのみにして口語には存せず。

命令形の述格に立つことは特に說くまでもあらざるべし。連用形の敘述を中止する意味にて述格に立つものは俳句殊に川柳に多し。

梅遠近南すべく北すべく。

春雨や花まつ人の心しり。

怠らずはげめ使はぬ桶は漏りぬ。

ゆゆしき身に侍ればかくて坐しますもいまいましう辱く。（源氏、桐壺）

三六一　用言の命令形以外の各活用形は述格をなしつつ、接續助詞を伴ひて下の語句に接續し、連用形は述格をなしつつ下の語句に重ぬる用をなす。

未然形を以てせるものは用言すべてに「ば」のつくとき、又形容詞に「と」「とも」のつくときにあらはる。

まつとしきかば今かへりこむ。

戀しくばきてもみよかし。

憎しくとも捨てむ。

已然形を以てせるものは「ば」「ど」「ども」のつくときにあらはる。

年歴れば齢は老いぬ然はあれど、花をし見れば物思ひもなし。
人おほければ天に勝つ。

終止形を以てせるものは動詞存在詞に「と」とも〔口語にては「と」「し」「けれど」「けれもと」〕のつくときにあらはる。

住吉とあまは告ぐともたがゐすな。
消えずはありとも花とみましや。
日は暮れぬとも行きつかでは止まじ。
日は暮れるし雪は降つて來るし路はいまだ遠い。
あの人の話によるとかやうの次第だ。

連體形を以てせるものは「が」「に」「を」のつくときにあらはる。

人は言はぬが我いふな。
日暮れかゝるに宿るべき所遠し。
雨ふるを濡れておとづれし君かな。

連用形を以てせるもの。

冬は寒く夏はあつし。
花落ち鳥鳴く。
本ごとに浪打寄せ枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。
花も咲くべく鳥もなくべし。
額朝は二弟をして平氏を攻めしめ己は鎌倉に止れり。

連體形の用法
連用形の用法
連用言

三六二　用言の連體形は連體格として用ゐらるるを主とし、上の如く述格として用ゐられ、又準體言をなすに用ゐらる。

これらの事はそれぞれの項に説きたれば、今略す。

三六三　用言の連用形は中止の述格をなし、又述格をなしつつ下に重ぬる用をなす外、下なる用言に連ぬるに用ゐらるることあり。之を連用言といふ。この際には下なる用言と同等の資格にて合同する意のものあり、下なる用言に從屬して之が修飾格に立つものあり。甲を同格連用といひ、乙を修飾連用といふ。

同格連用と修飾連用との區別は意義上よりみて重要なるものなるに、從來これを混同して一にし、甚しきは形容詞の修飾連用のものを以て副詞と稱して一の語類と見、なほ、同格連用のものの存するを忘れて、これをも副詞とせるもの頗多し。元來この用法は動詞にも存することは既に修飾格の條にとけり。そも〳〵國語の單語複合には既にいへる如くいづれにもこの同格と從屬との區別を見る。たとへば、名詞にていへば、

父母　親子　兄弟　姉妹　松竹梅

等は一團の觀念なれども、上の語と下の語とは同等の資格を以て相對するものなり。

山川　硯箱　手力　酒樽

等は上の語が下の語の修飾たる性質のものなり。即ち同格複合と從屬複合との二樣あるなり。而してこの同格複合の連用言即ち同格連用にして從屬複合の連用言即ち修飾連用なるなり。

同格連用

三六四　連用言の同格連用に用ゐらるるものは形容詞にも動詞にも存在詞にも存す。

かく同格連用言はすべての用言にあらはるる現象なるが、先づ、形容詞にて說明せむ。

櫻の花うるはしくさけり。
望月のかげ清くさやけし。

この場合のものは「うるはしく」「清く」は下の「さけり」「さやけし」と共に主格たる「櫻の花」「望月のかげ」に對して陳述をなせるものにして之を分解して次の如くなすことをうるものなり。

櫻の花うるはし　櫻の花さけり
望月のかげ清し　望月のかげさやけし

而、之を陳述する時にあたり、この二の意義を以て同時に說明せんとするが爲にかく連用形にて連ねたるものなり。又

け高く潔き丈夫の魂　あしげの馬の太く逞しきに乘る。

の如く連體格準體言にもあらはるゝことあり。かくしてこれらの二の用言は共に同等の資格を有するものなるが故に之を同格連用と稱す。

動詞存在詞にての例。

馬にて走り過ぐ。
父母は飢ゑ寒からむ。
風はいよ〳〵吹きすさぶ。

京にありわびて田舍に下りけり。
偉績燦然としてひかりかがやけり。

これらは又形容詞の場合の如く連體格準體言にもあらはるることあり。

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ。
いでいる人の尊ひ敬はぬはなし。
山林をいたはりそだつるは農作に劣らぬ事業なり。
豪傑たり哲人たるを望まむはもとより不可なし。

なほすべての同格連用はその用言に補語を伴ふものを以て之をなすこと少からず。その例

酒狂人は人に笑はれ人にそしられ人に疎んぜらる。
財に富み學に長けたれば。
恩に報い德に報ゆるは人の道なり。
師を尊び學を好み書を讀むものは賢者といふべし。

さてこれらの同格連用の語もその下なる用言との間には接續副詞を加へてその意を強くあらはすことあり。

不義にして富み且つ貴きは我に於いて浮雲の如し。
天巧の妙實に感すべく又驚くべし

さて形容詞の連用言は修飾連用よりもこの同格連用なるが少けれど、動詞にての連用言は主としてこの同格連用にして存在詞のは全くこれのみなりとす。

修飾連用

三六五　連用言の修飾連用に用ゐらるるものは形容詞に多くあらはる。動詞には甚だ稀にして存在詞には之を見ず。

形容詞の修飾連用の例。

彼性率直甚しく輕薄の風を罵れり。

春風輕く衣袂々吹いて征路長閑なり。

卽、「甚しく」「輕く」は下の「輕薄の風を罵れり」「衣袂を吹いて」に對して修飾限定をなす地位に立てり。而、これらは主語に對して、直接に陳述をなせるものにあらず。たとへば、これらの例にては、

彼性率直甚し　　春風輕し

の意にて用ゐられてあるものにあらず。さればこれらの連用形は下なる用言の修飾限定の用として從屬的に連ねられたるものなるが故に名づけて修飾連用といふ。形容詞にはこの連用言多し。

動詞の連用言にてのものは稀なれど、例なきにあらず。

衣服をいそぎかふ。

木の葉あらそひ落つ。

書をくりかへし讀む。

牛と熊とあひうつ。

さて「打ちかたらふ」「立ち別る」「取りみだす」「さしうつむく」「かきくもる」「あひ成る」等の例の「うち」「たち」「とり」「さし」「かき」「あひ」などは卽ちこの修飾連用の慣熟したるものなり。之を接頭辭とする人あれど、これただ慣用ありといふに止まりなほ動詞の連用形にして修飾連用に立てるものと認むるを穩

同じ動詞を重ぬるもの

なりとす。

三六六　同一の動詞又は存在詞を重ね用ゐる爲に上なるを連用形にしてその間に格助詞「に」「と」を加ふることあり。これは修飾連用の一變態にしてその意義を強むる場合に用ゐらるる法なり。

これらは疊語に似たれど、中間に助詞の存するを以てその一語に合成せぬものなるを見るべし。

その「に」助詞を中介とするものの例。

ふりにふる雨。　雨ふりに降る。

大軍もみにもみて進む。

臺盤所の胸をきりにきりて病ませ給ひしかば。

見せばやなをじまの海人の袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらじ。

待ちに待つた。　思ひに思つて。

これらはその作用の一向に行はれ、又は頻々なる意を示すものにして上なる連用言の「に」を踐めるは實は修飾格たるなり。卽ちその「ふりに」「もみに」「きりに」「ぬれに」「待ちに」「思ひに」などを今一層意を強く明にして示さむとする時にその上に程度の副詞又は接頭辭を添へて、

ただ食ひに食ふ。　いや茂りにしげる。

ひた泣きに泣く。

ひた走りにはしる。

などいふ時に明なるべし。試みに上の數例の上にこの「ただ」「いや」「ひた」などを添へてみよ。余が說く所直ちに明にさとらるべし。而してこの際には主たる下の動詞は連格にも、準體言にも、連體格にも用ゐらるるを見る。卽ち用言として自由に用ゐらるるを見るなり。

「と」の助詞を仲介とするものの例。

山の端に入りと入りぬる月なれば、
見と見るもの驚かずといふ事なし。
秋風のふきと吹きぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり。
荻の葉に吹きとふきぬる秋風の淚さそはぬ夕暮ぞなき。（新勅撰、四）
かたちこそ人にすぐれめ、何となくしとする事もをかしかりけり。（讃岐集）
ありとある人感じあへり。
ありとあらゆる物。

これらの例に事物にてはその一切に亙る意をあらはし、作用にては一向なる意をあらはすものなるが、そのあらはるる場合は連體格なる時に限られたり。これ亦上の「に」を用ゐたると同じく修飾連用の一格たり。

これらの格助詞の下に助詞「ぞ」「し」等を加ふることあり。

ぬれにぞぬれし色はかはらじ。
生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。
ありとしある人皆浮雲の思ひをなせり。

三六七　形容詞の語幹は直ちに述格に立たしむることあり、又助詞「の」を添へて連體格に立たしむることあり。これらの場合にはいづれも感動の意をあらはす。

形容詞の語幹を以て直に述格に立たしめたる例。

あゝいた。　おゝあつ。
あなおもしろ。　あなさやけ。

こは古今に亙りて存するものなり。

形容詞の語幹を連體格に立たしめたる例。

面白の春雨や。　心幼なの業や。
口をしの事や。　あな恐ろしの物語や。

これらの用例は奈良朝にはなく平安朝に最盛に用ゐられしものなり。これは現代の口語には用ゐられずといへども、文語と雖感動體の文にありては、頗有力なる形なれば、十分に注意をなすを要す。こゝにはただ連體語の方面よりしてあげたれど、この全體は實に感動體の文たるなり。

第三十八章　複語尾の用法

三六八　複語尾は概して活用不完全なるものなるが、その未然形を有するものは「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」「ず」「ざら」「て」「な」「たら」「べく」「まじく」「べから」「まじから」なり。

これらのうち、「べから」「まじから」の外は接續助詞「ば」に接して述格をなしつつ下につづくる用をなすを得るなり。

複語尾は用言の形體上の一部たるものなれど、用法繁雜なる故に特に一章を設けたり。本文にいへる例。

あたひとはれば千五百貫といらへよ。
とどむればありかへさせばなさけなし。
梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし。
心の中を見せたらば、今までつらき人はあらじな。
とぶ螢雲の上までいぬべくば秋風ふくと雁につげこせ。
この人えまぬかれ給ふまじくば己を殺したまへ。
今日こずば明日は雪とぞふりなまし。
世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし。

これらは「たらば」の外はすべて文語の法なり。

三六九　その未然形につく複語尾

複語尾の未然形にしてその下に更に未然形所屬の複語尾を附屬せしめうるものは、「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」「て」「な」「たら」「ざら」「べから」「まじから」なり。

この場合の用例は「ず」「べく」「まじく」には全くなし。

先づ文語にての場合を説くべし。

「れ」「られ」をうくるは「さす」「しな」「む」「まし」「ず」「じ」「さり」なり。

何事も仰せられず、たゞ「左樣か」といと輕く宣ひき。
再三熟考せよ。その眞意は理會せられむ。
幸に閣下たちのそを許されむことを乞ふ。
世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。
いづれがいづれと區別せられざるなり。
まづ戀しう思ひいでられさせ給ふに。
かずならば世にしられまし。

「せ」「させ」「しめ」をうくるは「らる」「む」「まし」「ず」「じ」「さり」「なり」。

殿下は故らに微笑を含ませられ輕くうなづかせられたり。
救ひまゐらせむ道なし。
危險なりといふまもあらせず、はや列車近づきぬ。
法皇忠盛に仰せて射しめらる。
かくまで人を感ぜしめむとは思ひよらざりき。
宮わたりにやきこえさせまし。

「な」「て」「たら」を受くるは「む」「まし」なり。

如何ならむ世にもかばかりあせ果てむとは思してむや。
たとひ運の極みなりとも都にていかにもなり給ひなまし。
眞中さして射透し候ひなむ。

深山に夜をあかしからむには恐しき事もあらむ。
呼びてはおきたらまじ。

「さら」を受くるものは「しむ」「む」「まし」なり。
人をして驚嘆にたへさらしむ。
誰かその精力の絶大なるに驚嘆せさらむ。
夢としりせばさめざらましを。

「べから」を受くるものは「ず」「ざる」なり。
桃山の建築につきては今詳に之を考ふべからず。
こは實に爭ふべからざる事實なり。

「まじから」を受くるものは「む」なり。
めでたくもあるまじからむ。

複語尾相互の間にはかくの如く互に關係あると更に關係なきものとあれば、之を辨別せざるべからず。

口語にてのものは次の如し。

「れ」「られ」(敬意以外)を「させる」(使役)「ぬ」「ない」「よう」「まい」にて受くるあり。
叱られさせる。
何ともせられぬ。
まだ起きられない。
あの人はいつか世間に忘れられよう。

そんなに世話はせられまい。

「せ」「させ」を「られる」「ぬ」「ない」「よう」「まい」にて受くるあり。
今日は休ませられる。
私は見させぬ。
椅子に腰をかけさせない。
どうかして辛抱させよう。
塵埃を捨てさせまい爲の札だ。

三七〇　「べから」に「む」を添ふることは古代に行はれしが、それ約まりて「べけむ」となれるあり。

人にして鳥に如かざるべけむや。

この「べけむ」は「べからむ」の約まりたるにて今日漢文口調の文に多く用ゐる。これは古代の語法にしてこれらの外「よからむ」を「よけむ」「をしからむ」を「をしけむ」といふ如く「からむ」といふ形を「けむ」とせること古代に多く用ゐられしなり。

三七一　複語尾にて連用形を有するものは「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」「ず」「ざり」に「て」「たり」「たく」「べく」「べかり」「まじく」「まじかり」なり。これらのうち述格をなして下に重ぬる用をなしうるものは「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」「ず」「て」「べく」「まじく」なり。

この場合の例次の如し。

その同格連用

父は京にて誅され、子は遠國に流さる。
天皇召して勅語を下され、皇后また優詔を賜ひぬ。
賴朝は二弟をして平氏を攻めさせ己は鎌倉に止れり。
忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫に見えず。
月さえて、雁高く飛ぶ。
花もさくべく、鳥も鳴くべし。
この事は君も諾すまじく、余も亦君に勸めざるべし。

三七二　複語尾の連用形にして同格連用をなしうるものは「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」「ず」「て」「べく」「まじく」なり。これらのうち「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」は下に動詞も形容詞も來りうるものにして「ず」「て」「べく」「まじく」は下に動詞のみ來りうるなり。

「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」の例。

御院參あらんにはまづ重盛が首を刎ねられ候へ。
宸筆を下して賞美せさせ給ふ。
紫に紅に藍に墨に見る見る彩られゆく山影うすくこくあをく黑く消されゆく人影皆これ詩中のものならぬはなし。
この言にては未首肯せしめ難かるべし。
人にそしられ易き地位に立てり。

その修飾連用

打たせにくきを念じて打たせぬ。
かかる場合の形容詞は重に難易をあらはすものなり。これは複語尾に限らず、動詞の下に來る形容詞は大抵かくの如き傾向あり。

「ず」「て」「たく」「べく」「まじく」の例。

その所在すら明に知れずなり候ひし者もこれあり候。
滿船何となう氣も浮き立ちて見ゆ。
小生も一度は拜見仕りたく存じ候ふ。
いふべくもあらぬ綾織物。
何の恐るべきこともこれあるまじく候ふ。

三七三　複語尾の連用形にして修飾連用をなしうるものは「ず」「て」「たく」「べく」「まじく」なり。

これらは卽ちその用言全體を以て修飾格をなすものなり。その例

花ごとにあかずちらしし風なれば。
聲をあげて泣きさわぐ。
十數里以上の間に恐るべく繁茂したる深林あり。
げにえたふまじく泣きたまふ。

以上二項、複語尾よりして動詞形容詞につづけうることの事實その狀態の說明は從來の文典にも文法敎科書にも缺けたる所なり。本書はこれも亦普通文中に於ける重要の事項と信ずるを以て、特に之を解說して注

その連用形につく複語尾

意を促すことゝせり。

三七四　「ず」「たく」「べく」「まじく」以外の複語尾はその下に更に連用形所属の複語尾を附することをうるものなり。

「ず」には古代にはこの用法ありしなり。そは次項に說けり。先づ文語にての場合を說くべし。

「れ」「られ」「せ」「させ」「しめ」を受くるは「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」「けむ」「たし」なり。

戰を挑まれしかば遂に干戈を交へき。

遂に男爵を受けられたり。

速に轉地療養あらむことを勸められけり。

賴朝義經をして義仲をうたせたり。

己が意匠を示して之によりて茶入を燒かしめき。

郊外の秋の色も思ひやられてうれし。

數年の後までも絕えず新しき記臆を我にひき起さしめぬ。

さるほどに綱方やみて卒去せられぬ。

いかに口惜しくおもはれけむ。

いかに思ひてかゝる事をせさせけむ。

下部をしてとりに行かしめつ。

何とかしてこの榮譽を受けさせたし。

「ざり」「たり」を受くるは「き」「けり」「けむ」なり。

余は余の選擇の誤まらざりしを信ず。

數日の間一人だにゝ遇はざりけり。

予は雜馬の廢墟に坐して夕暮の景色を眺めたりき。

なかばかくしたりけむもかうはあらざりけむかし。

萬の蟲どもをかたらひて入れたりけるなり。

「て」を受くるものも「き」「けり」「けむ」なり。

參議百川謀をめぐらして定め申してき。

手すさみに火桶のおきやわりてけむ。

御ぐしおろし給ひてければ。

「に」を受くるは「たり」「けり」「き」「けむ」なり。

荒れにたる宿のならひとて洩る月影ぞ隈もなき。

そのまつりを始められにき。

この枝かの枝散りにけり。

知りにけむ、きゝてもいとへ、世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる。

「べかり」「まじかり」を受くるは「き」「けり」なり。

やがて一日にきゝうかべたまふべかりき。

おとにぞ人をきくべかりけゝ。

まゐるまじかりしをせちにのたまひしかば。

なきあとまで人のむねあくまじかりける人の御覺えかな。

以上の場合の「に」「て」を受くるもの、「ぬ」「つ」「けむ」にてうくるものは共に古風の文にあらはるるのみなり。なほこの外に多少はあれど略す。

口語にては「れ」「られ」「せ」「させ」を「た」「たい」にて受く。

どうかしてほめられたい。

すつかりだまされた。子供をねさせた。

屏風にする繪を書かせたい。

「ずて」と「で」

三七五　古代にありては「ず」より「て」に接したることあり。又その「ずて」が約まり「で」となれることあり。

「ずて」の例。

いかで月みずてはあらむ。

「で」の例。

いなんもやらで說き出しぬ。

この「で」は文語には今も往々用ゐるところなるが、口語にては「いで」となれり。而してその所屬は「ず」の性質を失はず、未然形に屬す。その例

物言ふ事も叶はいで顏をしかめた。

見もせいでわるいとはいはれまい。

口語の「いで」

算用が出來てもできいでもぜひとも連れて行かねばならぬ。

複語尾の終止形

三七六　複語尾の終止形は「ざり」「べかり」「まじかり」の外いづれも終止して述格をなしうるものなり。又「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「ず」「ぬ」「つ」「たり」は述格をなしつつ接續助詞「と」「とも」を附して下につづくることを得るなり。

この接續助詞をつけたる述格の例。

人に誹らるとも意に介するに足らじ。

つかさを得さすとも兄にはまさらむ。

花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花。

徒に身はなしつとも玉の枝をたをらで更にかへらざらまし。

花薄ほにいでたりとかひやなからむ。

その終止形をうくる複語尾

三七七　複語尾の終止形にして終止形所屬の複語尾を伴ひうるものは「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」「ぬ」なり。

これは文語にての場合のみなり。而それらの複語尾を受くるは終止形所屬の複語尾すべてなり。

熱心に業務を勵まるべし。

その人は慰めらるべければなり。

たとひかくなしたりとて叱らるまじ。

小兒の毒草を摘むをみば早くすてさすべし。
實業をして盛なしむべし。
學生を　て放縱ならしむべからず。
學生をして沢して放縱ならしむまじき事なり。
なほこそものせらるめれ。
おそろしとこそおぼさるらめ。
みだりに人をとこそきこえさすめれ。
人にきかすまじと待ることを。
吉野山みねの櫻やさきぬらむ。
今の世の有樣昔になぞらへて知りぬべし。
猿澤の池の玉藻は見つべかりけり。
思ひつつぬればや人の見えつらむ。
天つ風こそふきてきつらし。

三七八　複語尾の連體形は連體格に立ち、準體言として用ゐられ、特別の述格として終止すること用言の本幹に同じ。

三七九　複語尾の連體形にして複語尾を伴ふものは文語にては「ざる」にして、口語にては「れる」「られる」「せる」「させる」なり。

「ざる」は連體形を以て終止形所屬の複語尾「べし」「べかり」を伴ふ。こは「ざる」が良行變格の特性を受けたるによつてなり。

素より佛國の敵にあらざるべきなり。
前途有望なりといはざるべからず。

なほ古くは「たり」などにも「めり」「べし」「らむ」「らし」などの附屬したりしもあれど、今略す。

口語の「れる」「られる」「せる」「させる」は連體形終止形同一なるものなるが、この形より「らしい」といふ複語尾につづく。その例

この本位は讀まれるらしい。
あの人は子供にそれをやらせるらしい。

三八〇　「まい」といふ口語の推量の打消の複語尾は文語と異にして語により種々の活用形に屬す。

「まい」は「まじ」の轉ぜるものなれば終止形所屬を本性とするに、口語にては連體形も終止形も同じければ、いづれに屬するとしてもよし。さて四段活用にはその終止形連體形に屬するを本體として、その他には未然形又は連用形に屬するなり。

四段活用の終止連體形につくもの。

とても間にあふまい。
今日中には出來上るまい。
だれもまだ行くまい。

そんな事はあるまい。

上一段、下一段、加行三段、左行三段の未然形につくもの。

これくらゐではこりまい。
まだ寝まい。
急にはこまい。
驚きはせまい。

左行三段には又連用形につくことあり。

とても信じまい。
そんなに心配しまい。

かかる性質あるよりして複語尾「れる」「られる」「せる」「させる」の未然形より「まい」につづくなり。

その例

なかなか重くて持たれまい。
まだ起きられまい。
私に讀ませまいとする。
試驗を受けさせまいとする。

三八一　複語尾の已然形はすべて係助詞「こそ」に對しての述格をなすこと用言の本幹に同じ。而して「む」「けむ」「らむ」は接續助詞「ど」「ども」に接し其他の「じ」「らし」以外のものは接續助詞「ば」「と」「ども」にして述格をなしつつ下につづく。

その「こそ」に對しての述格及び接續助詞「ば」「と」「ども」に接せるものの例はより〳〵あげたればこゝを略し、「む」「けむ」「らむ」の已然形を「ど」「ども」にうけたるものをあぐ。

花の木にあらざらめども咲きけり。
かへしはよかりけめどえきかねばかかず。
色も香もおなじ昔に咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける。

三八二　複語尾にして命令形を有するものは「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「ざり」「ぬ」「つ」「たり」にしてこのうち「ざり」「たり」「ぬ」はその命令形のまゝ、その他は助詞「よ」を添へて命令の用を完うして述格に立つ。

本文にいへる命令形の述格の例。

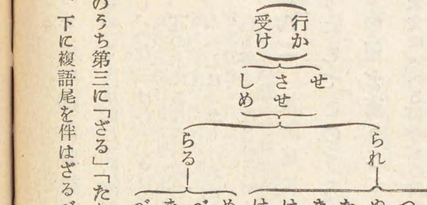
早く行きね。
惡しき事はせざれ。
置いたれ〳〵一種とらむ。
しばらく靜まられよ。
余をして暫しその次第を語らしめよ。
君わたりなばかぢかくしてよ。

三八三　以上には複語尾二個の連續を說きたるが、複語尾はなほその上に意

義を委しく示す爲に三個以上の連續せるものあり。

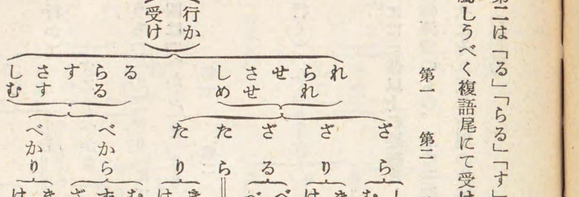
この事は先づ三個連續のものと四個以上の連續とに分ちて説くを便とす。

三個連續のものは四の系統あり。第一は「す」「さす」「しむ」「らる」にてうけたるものを更に「ず」「ざる」「む」「つ」「ぬ」「たり」「き」「けり」「けむ」「めり」「べし」「まじ」「べから」にてうけたるものなり。



右のうち第三に「ざる」「たり」のあるものは、なほ下に複語尾を加ふるを得べく、「べから」のあるものは必ず、下に複語尾を伴はざるべからず。それは四個連續の條に説くを見よ。

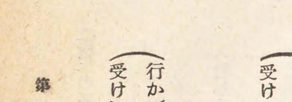
第二は「る」「らる」「す」「さす」「しむ」を「ざり」「たり」「べかり」にて受けたるものを更にそれらに附屬しうべく複語尾にて受けたるものなり。



右のうち第三に「しむ」「ざり」のあるものはなほ下に複語尾を加ふるをうべく、「べから」のあるものは必ず下に複語尾を伴はざるべからず。

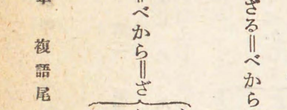
第三は「ざる」を「しむ」「べかり」にて受けたるものを更にそれらに附屬しうべき複語尾にてうけたるもの

なり。



右のうち「たり」「ざり」にてうけたるものは更に下に複語尾を伴ひうるなり。

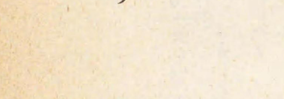
第四は「べから」を「ざり」にて受けたるものを更にそれ〳〵の複語尾にて受けたるもの。



これには三個以上の連續なし。

四個連續のもの。上の三個連續のうち第三を「しむ」「ざり」「たり」「べから」にてうけたるものは更にその次にそれぞれ所屬の複語尾を附屬しうるなり。

（第一の系統）

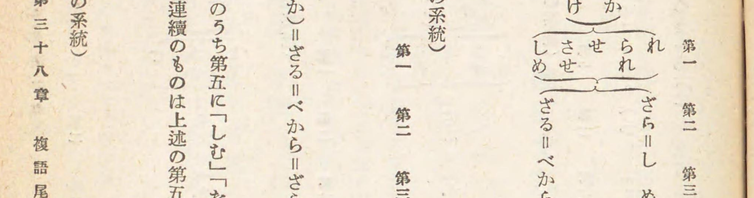


（第二の系統）

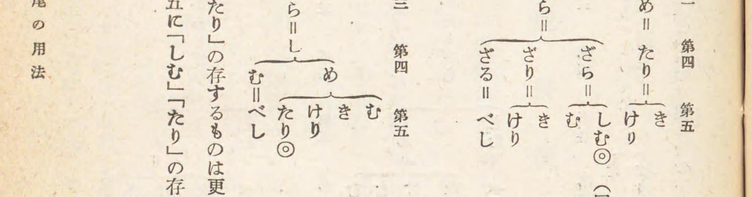
（第三の系統）

以上のうち第四に「ざる」「しむ」「たり」の存するものは更に次にそれぞれの所属複語尾を附属せしむるを得。五個連續のもの。上述の第四に「ざる」「しむ」「たり」の存するものに更に所属複語尾を附属せしめたるものなり。その式次の如し。

（第一の系統）



（第二の系統）



（第三の系統）

以上のうち第五に「しむ」「たり」の存するものは更に次にそれぞれの複語尾を附属せしむることをう。六個連續のものは上述の第五に「しむ」「たり」の存するものに更に所属の複語尾を附属せしめたるものなり。

（第一の系統）

第一　第二　第三　第四　第五　第六　（第七）

（行か／受け）（せ／させ／しめ）＝らる＝べから＝ざら＝（しめ＝（む／き／けり）／たり◎＝（き／けり）／しむ＝べし）

（第二の系統）

第一　第二　第三　第四　第五　第六　（第七）

（行か／受け）（れ／られ／せ／させ／しめ）＝ざる＝しから＝ざら＝（しめ＝（む／き／けり）／たり◎＝（き／けり）／しむ＝べし）

（第三の系統）

第一　第二　第三　第四　第五　第六

（行か）＝ざる＝べから＝ざら＝しめ＝たり＝（き／けり）

以上のうち第六に「たり」の存するものは更にその下に「き」「けり」を附することをうるによりてこゝに七

個連續のものを生ずるを得べし。

以上多數の連續は多くは理論上成立しうべきをいへるに止まり、實例としては四個連續以上のものは甚だ稀なりとす。

第三十九章　音便

音便の種類

「イ」の音便

三八四　種々の語の合成使用せらるる際、連聲上の便宜によりて發音の上に特別の變化の生ずることあり。この現象を音便といふ。

音便の事は從來幾多の文法家の說けるに關せず、その學理上の十分なる說明を受けたるもの殆どあらざりき。著者が平家物語の語法に於いて之を總括して學理上の說明を與へたるや蓋しそがはじめならむ。今玆にはそれの梗概をとり現代の語にあらはるるものを主として說くべし。

三八五　音便は之を「イ」の音便、「ウ」の音便、撥ぬる音便、促むる音便の四種に分つ。

三八六　「イ」の音便とは「キ」「シ」の音が語の中間の音又は尾音としてある時にその子音を失ひて「イ」の母韻のみを殘し、以て上の音と緊接して連續體となれる一種の狀態をさす。

この音便は「きさいの宮」「さいはひ」の如く名詞にもあらはるることあれど、語法上必要なるは用言にあらはれたるものなり。形容詞にてはその連體形の「キ」は音便によりて「イ」となる。現今の口語の終止に

「イ」を用ゐるは實は連體形を通用したるものなること既に第八一節に述べたるところなり。

動詞にては加行四段活用の連用形の「キ」佐行四段活用の連用形の「シ」を「イ」とすることあり。加行四段にてこの現象の生ずるはその連用形を動詞につづくる時、複語尾「て」「たり」にて受くる時にあり。その動詞につづくる場合の例。

猫殿今少シカイ（掻き）給ヘトソ申タル。（延慶本、平家、四）

なさけつい（付き）たまへる人にて、（宇都保、忠こそ）

つい（突き）立ちて外の方に向へり。

複語尾「て」「たり」「た」につづくる場合の例。

これに就い（つき）て面白き話あり。

仰い（仰ぎ）で天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず。（榮　日　記）

しさまもいとからめい（めき）たり。（平　家、一）

鞆繪かい（書キ）たる筆の軸。

十五束ノヌリノニ鷲羽鷹羽鶴本白破合セニハイ（矧ギ）ダリケル矢ヲ以テ射タリケルニ（延慶本平家六本）

話をきい（聞き）た。

舟をこい（漕ぎ）た。

かかる時に「き」が濁音なる場合には下の「て」「たり」に濁音をうつす。「仰いで」「矧いだりける」「漕いだ」の如きこれなり。

複語尾の「べし」の連體形「き」をこの音便にして「べい」といふこと古くありしなり。

さもあべい事なれば。（源　氏、胡　蝶）

はしたなくもあべいかな。（源　氏、朝　顔）

思へばうらめしかべい事ぞかし。（源　氏、胡　蝶）

佐行四段活用にてこの現象の生ずるは複語尾「て」「つ」「たり」につづくる時にあり。その例

まい（況し）て雁などのつらねたるがいと小さく見ゆる、（枕、一）

おしはない（押放し）ていふもされたり。（堀　中、語）

或又若射ハツイ（外シ）ツル物ナラハ先ニ扇ヲ射タリツル事モ氣味有マシナイソト云者モアリ。（延慶本平家六本）

いとあはあはしとおぼしめい（思召し）たれば。（榮　日　記）

木曾悦テ信乃馬一疋ツツクタヒ（下シ）タリケル。（延慶本平家三本）

三八七　「ウ」の音便とは「ク」「ヒ」「ミ」の音が、中間音としてある時に、それが「ウ」韻の長呼に變じて上の音と緊接して一連續體となれる一種の狀態をさす。

これも名詞にあらはれたるものあれど、それは省きて、ここには用言に於けるもののみを説くべし。

形容詞に於けるものはその連用形の「ク」をば「ウ」と**す**るものにして、そは用言につづくる場合、そのうち特に「す」「して」「したり」につづくる場合、「て」につづくる場合等にあらはる。その例

うつくしう（美しく）おはするにて知りぬ。（竹　取）

月くまなう（無く）あはれなり。（宇都保、俊　蔭）

サラハトウ〳〵（疾ク）迎へ奉レヤ。（延慶本平家一末）

世の中におほかる人をだにすこしもかたちよきをきゝてはみまほしう（欲シク）する人なりければ、かくやひめをみまほしうして、（竹取）

からうしてかき給ふ。（竹取）

心サカ〳〵シウシテ一生不犯ノ女房ニテオワシケレバ、（延慶本平家二本）

東帯タタシウシタル者カ放本鳥ニテサハカリ正シキ御前ヘネリ出タリケルケシキ（延慶本平家二本）

聲はをかしうてぞあはれにうたひける。（伊勢、語）

イカニスヘキ様モナウテ大垣ノ在ケルヲ超ムゝゝトシケル程ニ、（延慶本平家、四）

動詞にては波行四段の連用形の「ヒ」、麻行四段の連用形の「ミ」をば「ウ」とすることあり。波行四段の連用形「ヒ」の「ウ」となる音便は複語尾「て」「たり」「た」につづくる時にあらはるものなるが、古くは用言につづくる際にもあらはれたり。その例

思ひたまう（たまひ）なげく。（宇都保、祭の使）

學士をかへて琴の師をつかう（つかひ）まつれ。（同　俊蔭）

九日もふきあげをおもう（思ひ）たまふればこそらうあれ。（同　初秋）

その「て」「たり」「た」につづくるものの例。

火出づる程ぞたたかう（戰ひ）たる。（保　元、二）

ヒトリ寒窓ニムカフ（向ひ）テ明月ノスキヤスキコトヲウラミ、（朗詠要抄）

人々爭う（爭ひ）て難に赴く。

波に漂う（漂ひ）て危く見ゆ。

飼ひに飼う（飼ひ）たる馬なれば、

今そこで萩野に逢う（逢ひ）た。

君によろしくという（言ひ）た。

麻行四段の連用形「ミ」の「ウ」となるものは複語尾「て」「た」につづくる場合にあらはる。その例

左右ノ手ニハナマシキ魚ノ少ヲ二ツ三ツニキテハケウ（勵み）テアユム様ニハシケレトモ、（延慶本平家二本）

さらば夜もすがらいとなう（營ミ）て御見せ候へ。（謠曲、安達原）

頼う（頼み）だ御宿をわすれた。（狂言、烏帽子折）

これは口語にては、

酒を飲う（のみ）だ。

の如く方言に存す。而していづれも、下なる複語尾を濁音に化せしむるなり。

複語尾にては「たし」「べし」「まし」の連用形なる「く」を「ウ」とすることあり。このうち「べう」は古き語法なり。その例

楊貴妃のためしも引きいでつべうなりゆくに、（源、桐壺）

神輿ヲハ左衛門ノ陣ヘ廻シ入奉ラルヘウモヤ候ラム。（延慶本平家一本）

あるべうもなしあれ制せよものどもゝ。（保　元、二）

「たう」「まじう」は今も用ゐる。

此舟に打ちのせ奉てのぼりたうは候へども、（平　家、三）
物ノ見タウモナイ腹ノ立タル事ナリ。（史　記　抄、九）
それをば君もしろしめされまじう候ふと申すべし。（平　家、二）

副詞にて「かく」を「かう」といふもこの音便なるなり。
今ハトカク申ニ不及軍ハ今ハカウ候。（延慶本平家六本）

撥ぬる音便　音體の鼻音化する音便

三八八　撥ぬる音便とは「ニ」「ビ」「ミ」「リ」「ル」等の音が、中間音となれる時に前後の音の關係によりて鼻音に轉化し、上の音と緊接して一連續體となる一種の狀態又は特に鼻音を中間に挿入する如きものをさす。これにつきては次の三の狀態存するを見る。

一、その音自體が鼻音となれるもの。
二、次に來る音の感化によりて鼻音と化せるもの。
三、「ン」を挿入せるもの。

三八九　その音自體が鼻音に轉化する音便は「ニ」「ビ」「ミ」が中間音となれるときに生ずるものにしてその生ずるには、次の三の場合ありとす。

一、波行四段の濁音の活用の連用形「ビ」に於けるもの。

二、麻行四段の連用形「ミ」に於けるもの。
三、奈行變格の連用形の「ニ」、副詞の末の「ニ」、複語尾の「ニ」、助詞の「ニ」を「ン」とするもの。

波行四段の濁音の活用の連用形「ビ」に於けるものは複語尾「て」「た」につづくもののみを見る。
伶人舞曲ヲツクシタルニ及ムテ宮中スミワタリ群集諸人各ノ袖ヲシホリケリ。（延慶本平家三末）
飛んで火に入る夏の蟲。
土木を運んで祠堂を營む。
私を喚んだ人は誰だ。

この際は下を濁音にすること上例の如し。次下麻行四段、奈行變格の例また同じ。

麻行四段の連用形「ミ」に於けるものは動詞につづくると、複語尾「て」「たり」「た」につづくるとの二の場合あり。

渡セヤ〳〵ツヨクノレ鐙フムハレ立アカレトテマ十文字ニサツト打ワタシタリ。（延慶本平家五本）
鬢アヤシムテ開キ見レハ青紙ニ赤文字也（延慶本平家、四）
夕には月を踏んでかへる。
赤梅檀を刻んで尊容を模す。
その勢五十餘騎思ひ〳〵の旗指物を押し立てて眞先にぞ進んだる。
昨日この本を讀んでしまつた。

したたかに酒を飲んだ。

奈行變格の連用形の「ニ」に於けるものは複語尾「て」「たり」「た」につづくる場合にあらはる。

往んじ嘉吉の戰に。

死んで謝するより外に途なし。

それが基になつてとうとう死んだ。

副詞「いかに」「なに」の「ニ」を音便にて「ン」とすることあり。

イカムトナレハテイヒムニ琵琶ノ三曲ヲ授之時一ノ秘曲ヲノコセリ。（延慶本平家二本）

かつは冥の照覽もいかんか御憚なかるべき。（保　元、　一）

論議ト云ハナムソ。（延慶本平家二本）

是程ノ事ニナリテ殘留ル身共安穩ニテモナムノ甲斐カハ有ヘキ。（延慶本平家一末）

なんぞ外に求めん。

複語尾「に」が「たり」につける時に「ン」となれるものあり。

御幸大嘗會モ既近成ムタリ。（延慶本平家、四）

樂天ヨリモワカイコト三年ナヲステニヲトロヘムタルヨハヒナリ。（朗　詠　要　集）

徐君か塚の秋の松三尺の霜ふりんたり（宴曲集五、遠玄）

助詞の「ニ」を「ン」とせるものは次の如き場合に生ぜり。

內侍達サム候ト申ケレハ、（延慶本平家一本）

さん候ふ、悉く知りて候ふ。（謠　曲、鉢　木）

なかんつく一院崩御の御中陰をだに過させたまはずして出御あらむ事素意及びがたし。（保　元、　一）

まことにさきんずる時は人をせいす。（同　）

シハ〳〵胡門ノ暮ノ堤ニ驚ク胡國イツクムカ有ル。（延慶本平家一末）

鄉國イツクムカアル落葉マトフカシ。（朗　詠　要　集）

いづくんぞ知らむ。

ひけやひけや手ん（に）手に。（謠　曲、道成寺）

三九〇　次に來る音の感化によりて鼻音と化せる音便は、奈行音の上にあると痲行音の上にあるとの二の場合あり。

次の音の感化による撥音便

三九一　奈行音の上にある場合にその感化によりて鼻音化する音便は名詞の尾音「リ」（主として良行四段活用の連用形より化せるもの）が存在詞「なり」助詞「の」「に」につづく時、又良行四段活用の連用形「り」が複語尾「ぬ」につづく時に起る場合と、良行變格活用なる用言及び複語尾の連體形「ル」が存在詞「なり」につづく時に起るものとの三の場合あり。

奈行音の上にあるもの

これらの場合のものは「ノ」「ニ」「ヌ」「ナ」いづれも舌內鼻音を子音とせるものなるが、その上なる「リ」「ル」が輕微となりたる爲に遂にその「ナ」「ニ」「ヌ」「ノ」の感化によりて鼻音に同化したるものなり。

一、名詞の尾音「り」が「なり」につづく場合に「ン」となれる例。

哀愍目謹のみぎん(砌)なればいつくに大蛇のあるべきぞ。　(謠曲、道成寺)

一身ノサカム(盛)ナルコヽロヲイタルヲモイ。　(朗詠要集)

名詞の尾音「り」が助詞「の」「に」の上にある場合に「ン」となれる例。

行家アマノ命生テ攝津へ落ニケリ。　(延慶本平家四)

(これは「ン」を略してかかざる往時の慣習によれるなり。)

耿々タルノコン(殘リ)ノトモシヒノカヘニソムケタルカケ。　(朗詠要集)

くだんの大鏑をもつてひやうと射給ふが、　(保元、二)

その勢盛んにして當るべくもあらず。

二、良行四段活用の連用形「り」が複語尾「ぬ」につづく場合に「ン」となれる例。

南无歸命頂禮遍昭大師今日已ニ二生燈明ヲ宿願滿足シ畢ム(ヲハリ)ヌト御聲ヲアケテ申サセ給フ時ニコソ供奉ノ人々耳目ヲ驚シ給ケレ。　(延慶本平家三本)

さん(去り)ぬる二日　(保元、一)

僧ニアウテ談スルトコロニヤウヤウニ世俗ノミムナシキコトヲサトム(サトリ)ヌ。(朗詠要集)

九品蓮臺ノアヒタニハ下品トイフトモタム(足リ)ヌヘシ。　(朗詠要集)

周穆ノアラタナル會西母カクモカヘム(歸リ)ナムトス。　(同　)

終に山伏をとりおはむ(畢り)ぬ。　(謠曲、道成寺)

三、良行變格活用の「あり」及びその系統に屬する存在詞「かり」「なり」、複語尾「さり」「たり」「まじかり」等の連體形の「ル」が、「なり」につづく時に「ン」となれるものの例。

麻行音の上にあるもの

サテハマメヤカニ無緣貧道ノ僧ニコソアムナレ。　(延慶本平家、一本)

信濃にあんなる木曾路川　(平家　六)

サテハ山門ニ聞ユル僉議者コサムナレ。　(延慶本平家、一本)

(「コサムナレ」は「ニコソアルナレ」の約畧なれば「ゴサンナレ」とよむなり。)

草顏淵が巷に滋かんなるものをな。　(宴曲集五、草)

判官ヨカンナルハ打ヤ殿原トテ、　(延慶本平家、六本)

賤士が假寢の稻莚棹麁の音に驚かされておどろかすなんなる物をな。(宴曲集一、秋)

外記の廳の有樣由あなる物をな。　(宴曲抄、下、內外)

キト見知ルマシキ事ハ身ヲヤツシテ尋常ナル鎧ナントモ着サンナリ(延慶本平家、六本)

希に開くる優曇花の花待えても百千度改らざんなる物をな。　(宴曲集二、優曇花)

我父ハ軍ニコソ死タムナレ。　(延慶本平家、五本)

サテハ一期コサムナレ子孫相繼マシカムナルコソ心ウケレ。　(延慶本平家、二本)

三九二　麻行音の上にある場合にその感化によりて鼻音化する音便は良行變格活用の「あり」「なり」の連體形の「ル」が複語尾「めり」につづくときに起るものなり。

これらの場合のものは下なる「めり」の「め」が唇內鼻音を子音とせるものなるよりして、その「ル」音が、輕微となると同時に「め」の感化を受けて唇內鼻音に同化したるものなり。この故に前項の奈行音の上のものとは學術上區別すべきものたることは明なりとす。

「アルメリ」「カルメリ」「ナルメリ」にあらはれたるもの。

哀レ無由事シツル者哉キヤツハラハケシカル者共ニコソアムメレ。（延慶本平家、六本）

いでやこの世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ。（徒　然　草）

疑ナキ鬼ナムメリ。（延慶本平家、三本）

「ニコソアルメレ」を「ゴザムメレ」とせるもの。

己レ等ハ何物ソアタコ平野ノ天狗メ等コサンメレ（延慶本平家、二中）

カネ付サセ給テ候ハ平家ノ一門ニテオワシマシ候コサムメレ（延慶本平家、四　）

あらふしきや今の物仰られつるは正しく我子の千満殿こさめれあら珍しや候。（謡曲、三井寺）

「ン」を挿入せるもの

三九三　「ン」を挿入せるものは「くんば」「ずんば」「てんげり」の如きものこれなり。この類の音便は普通の場合と趣を異にせるものなり。「くんば」「ずんば」は既に第二十一章二二項にいへり。「てんげり」は平家物語頃に多く用ゐられしものなり。その例

佐々木誠ヤ生喰ヲハコ、ニノラムトテコソ引セタリツルニ忘デムケル事ノ口惜サヨトテ。（延慶本平家、五本）

いみじきすきものにてぞありける。死ぬるとても歌をよみてんけり。（著聞集五、和歌）

促むる音便

三九四　促むる音便とは「キ」「チ」「ヒ」「リ」等の音が中間音として加行音、左行音、多行音の上にある時に連聲の便によりて口腔の閉鎖又は狭窄を起してその音の略し去られたる姿を呈するをいふ。

左行音の上なるもの

三九五　左行音の上にあらはるる促むる音便は、加行四段の連用形「キ」波行四段の連用形の「ヒ」が動詞に連なる時、良行四段の動詞存在詞及びその系統の複語尾の連用形の「リ」が、複語尾「シ」に連なる時に起る。

この音便は口腔の狭窄によりて起るものにして加行音、多行音の上に於けるものとは性質を異にするなり。

加行四段、波行四段の連用形に於ける例。

誰かあるあれひつさげて参れ一目見む。（保　元、　二）

道セハクテ僅ニ二三騎ツヾヲスカイニ馳來ケレハ。（延慶本平家、二末）

良行四段の連用形の「り」が複語尾「シ」につづく時に起る例。

秦皇ケイタンス燕丹カサツシヒノカラスノカシラ、漢帝シヤウサス蘇武カキタツシ時ノツルノカミ。（朗　詠　要　抄）

漢皓秦ヲサシアシタノソミ孤峯ノツキヲサヘ、（同　　）

李陵カ胡ニイツシニオナシ、タ、異類ヲノミミル。（同　　）

調子盤渉調ニテ萬秋樂ノ秘曲ヲ奏セラレシニ五六ノ帖ニナシカハ天井ノ上ニ琵琶ノ音風ニ聞ユ。（延慶本平家、一末）

存在詞及びその系統の複語尾の連用形の「り」が複語尾「シ」につづく時に起る例。

秦始皇ノ虎狼ノ心アリシ梁ノ武王ノ勇ノタケカリシ頼光頼信ガ計事ノ賢カシモ冥途ノ使ニハ叶ハサリキ。（延慶本平家、三本）

無間の底に堕罪すべかつしを一僧一宿のくりきに引れ急き佛所にをくらむと、（謡曲、鵜飼）

去年はりまの室山備中の水嶋ひよとり越にいたる迄一度も味方の理なかつし事ひとへに義経がはかりことといみしきによつてなり。（謡曲、景清）

管仲なかつせばわれそれ被髪在衽せむ。

三九六　加行音の上にあらはるる促むる音便は加行四段の連用形「キ」貫行四段の連用形「リ」が動詞に連なる時に起る。

加行音の上なるもの

この音便は喉的閉鎖の生ずるより起るものなり。

加行四段の連用形「キ」がカ行音を頭とせる動詞に連なる時に於けるもの。

兄弟同ホトノ力ニテ有ケル間五ニヒクミテ臥タリケルヲ、（延慶本平家、五本）

兼平にいさめられ又ひつ返し落給ふ。（謡曲、兼平）

二百餘騎にておつかけたり。（保元、二）

良行四段の連用形「リ」に於けるものは口語に多し。たとへば「とりくむ」の「とつくむ」などいふこれなり。

三九七　多行音の上にあらはるる促むる音便は多行四段の連用形の「チ」、波行四段の連用形の「ヒ」、良行四段及び良行變格の連用形「リ」を略せるものの三様ありて、いづれも動詞又は複語尾「て」「た」につづくる際に起る。

多行音の上なるもの

この音便は舌的閉鎖の生ずるより起るものなり。

多行四段の連用形の「チ」に於けるものの例。

勝つて兜の緒を締めよ。

三遍ニサイタテソノハナヲフケハアカツキノホシノ河漢ニ轉スルカコトシ。（朗詠要抄）

うつ立つたり。

波行四段の連用形「ヒ」に於けるものの例。

某おつつきとめ申候へし。

誓つてこの恥を雪がん。

波アラツテキエナムトス。（朗詠要集）

北へむかつてぞあゆませける。（保元、二）

良行四段の連用形「リ」に於けるものの例。

凝つては百錬の鐵となる。

あ降つたる雪かな。

ハヤシヲ辭スル舞蝶ハカヘテ一月ノハナニ翻翻タリ。（朗詠要抄）

禪侶壇ニムカフ金磬ナツテヒビキアリ。（同上）

內裏へ參るAならば、宣旨の御使にうちつらなつて參じ給へ。（保元、一）

若年より此わざにて候へとも若年より此わざにて命を扶り候程に今更とまつへきもなく候、（謡曲、鵜飼）

存在詞の連用形「リ」に於けるもの。

命あつての物種。

かやうの事もあつた。

形容存在詞の連用形「かり」の「り」を略したるものあり。

面白かつたか。それはよかつた。

形容存在詞には上の外「ツル」につづくるにこの現象ありしたり。その例

カイナキ命ノ惜カツルモ歸リ上リタルウレシサモコノ人々ヲ今一度見奉見ヘ奉ムガ爲ニコソ有ツルニコハイツクヘソヤ。（延慶本平家、六末）

又複語尾「さり」にも「ツル」につづけてこの音便を起せるものあり。その例

ナト扇ヲハツカヒ給ハサツルソト問ケルニ（延慶本平家、三末）

第四十章　句論總說

三九八　句論は文を構成する法則を論ずる部門にして語を材料として構成する思想發表その事を研究するを主眼とす。

句論は語を材料として文を構成する法則を論するものなるが、これと語論との差異は語論は思想發表の材料の研究にして句論はそれらの材料を使役して構成する思想發表その事の研究なる點にあり。

從來句論は文章論と稱せられ、而して文章構成の方法を研究すと稱せられたり。かくてかの語の運用の研究の如きをあげて文章論に委したり。されどこれらは既にいへる如く語と語との關係にして思想發表の材料とこそはなれ、思想の發表その事の研究にはならぬなり。而して語論と句論との區別の主點はそれらの材料

を個々に見て取扱ふか、又その構成體を統合ある一個體として取扱ふかにあり。たとへば、

松は常盤木なり。

といふ文ありとせむに、その各語に意識を注ぎて各個として研究するものは語論の任務にしてこれらの構成體を一の文として取扱ふものは句論の任務なり。即ち吾人が一の句なりと思惟する際には音節、文字、單語の數の多少等に拘泥せずして之を思想上の一個體なりと考ふるにあり。されば、語論にては解剖學の如く靜止的に死物的に對象を取扱ふに對して、句論にては生理學の如く生物的に活動的に對象を取扱ふなり。即ち句論にてはいつにても直ちにその對象を活動せしめて以て思想を發表する方法として觀察す。而してその主たる點は意識の注點の言語に寓せられたる場合の研究なれば、自然に意識と密接の關係を有し、語論よりも一層深く心理的現象に關係を有するは明なり。

三九九　句論の範圍は言語によりてあらはさるる思想發表の形式を記述するに止まる。

句論は語論と相待つ文法學の二大部門の一なること既に述べたり。然るに從來文章論と稱せられたる爲に往々修辭學に混同せられ、又論理學と混同し易し。この故に先づそれらとの區別を明にしてその混同を避けむとす。即ちかの修辭學は文を研究對象とする點に於いて句論と似たる點あり。されど、句論は現象の記述に止まり、この巧拙を論することなく、又それは言語上の現象に止まり、思想上の可否は問ふ處にあらざるなり。この故に修辭學とは目的と範圍とを異にす。論理學は思想を直接の對象とするが故に句論とは目的を異にすれど、その思想を言語にあらはすことを論ずる際には、往々句論に交渉する點ある如く見ゆ。然れども論理學はその思想の正否を論ずるに止まり、加之理性に關する點のみにして、その他の感情意志等の方面に

は及ぶことなし。その判定又は推論の言語にあらはるる形式を論ずる點は句論に似たるところありとするも、その目的は思想の當否にあり。さればこれ亦目的と範圍とを異にするものなること明なり。

四〇〇　連語

多數の語を集めて、ある複雜なる觀念をあらはせど、完全なる思想をあらはすにあらざるものを連語といふ。

ここには多くの語の集りてなるものと一の完全なる思想をあらはせるものとの區別を明にせむ爲に先づその文又は句と稱すべからぬものを說く。

月下に奏する劉亮の曲。

檢非違使等の武職。

徐に步む。

遙に高し。

わが隣に住む。

玆に示したるものは體言と體言とを連ね、體言と用言とを連ね、或は用言と副詞とを連ね、又その間に助詞を加へたりなどして夫れ〳〵の意味をあらはしたるものなり。これらは多くの單語を集めて一に連綴したる語をなせども、完全に思想をあらはすものにあらず。かくの如きものを文法學上連語といふなり。

ここに連語といへるは英語に Phrase といへるにあたる。これは數語をつらねてある觀念をあらはするのみのものをさす語なり。從來往々之を句といへり。然れども句とは一の完全なる思想をあらはせるものの名なれば、當らぬなり。

四〇一　文

思想が言語によりてあらはされたるものを文といふ。

文は語の集合より成れるものなるが、これをただ外貌より見れば、單語の集合たるに止まれり。その之を文と稱するを得る所以のものはその內面に存する思想の力たるなり。惟ふに思想とは人間の意識の活動狀態にして各種の觀念が或一點に於いて關係を有し、その一點に於いて結合せられたるものならざるべからず。而してこの統合點は唯一なるべし。意識の主點は一なればなり。この故に一の思想には一の統合作用存す。之を統覺作用といふ。この統覺作用これ實に思想の生命なり。この統覺作用によりて統合せられたる思想の言語といふ形にてあらはされたるもの卽ち文なりとす。

四〇二　句

文法學上文の基礎たる單體を句と稱す。

抑も事物を研究するにその對象の自然に單體をなせるものの外は、その研究の基礎たる單體の何なるかを審定せざるべからず。この故に語論には單語を以て研究の基礎とせること既に述べたる所なり。さて句論にては文又は句を研究の對象とするがその研究の基礎は奈邊に存するかといふに從來の諸家は吾人が語の運用の研究に用ゐたる主語述語等を以て文の要素とせり。されど、これらは文構成の素材といふべくして文そのものの要素といふべからず。それ文の要素といふ以上は、そこに意識の注點の集注せられて思想をあらはしたるものたらざるべからざること、かの化學にていふ元素の如く、一の單體として分析して異種のものに分つべからざるものをいふに似たるものならざるべからず。今主語述語等を一の單體なりとせんか、何の單體なるべきか。文の單體たるべくもあらねば、語の單體といふべきに似たり。されど、かくては語論上の名目たるに止まり、句論上何の用もなきに似たり。

されば、文の要素として研究の基礎たるものは文の最單純なるものをさすに近し。この文の最單純なるも

のは單文なりと稱せらる。されど、この單文といふにつきて論ずべき事あり。抑も文といふに二の義あり。一は修辭學上の文にして英語にて Composition 獨語にて Aufsatz といふものなり。一は文法學上の文にして英語にて Sentence 獨語にて Satz といふものなり。この二者は混同せられ易きものなれど、又混同すべきものにあらず。さてこの Sentence 又は Satz をば單文と譯する人あれど、かく譯する人はかの獨逸文法などにいふ Einfache Satz, Zusammengesetzte Satz を何といはむとするか。前者は單文と譯し、後者は複合文と譯すべきものなれど、Satz を單文と譯する時はこれらは單一なる單文、複合せる單文とせざるべからず。世にあにかかる不合理なる說明あらむや。この故に單純に Satz といふ語にあてむには單文の單字を除かざるべからず。然れどもかく文とのみいふ時は上の修辭學上の文とも混じ易きのみならず、文法學上文の基礎たる單體を示す語としては甚だ紛はし。この故に余はその基礎たる單體を句と稱せるなり。

この句といふ語は從來の文法家は英語の Phrase 即ち上にいへる連語の意にも Clause の意にも用ゐたり。連語を句といふことのあたらぬは上にいへり。この Clause は句といふに差支はなけれど、句はすべて Clause にはあらず。即ち Clause は主として附屬性の句のみを稱せり。かくの如くにして說くもの往々句を以て文の一成分なる如くいへれど、元來句といふ語は附屬句たる意にあらずして寧ろ獨逸語の Satz にあたるものといふべし。さてこの句といふ語の意義を檢するに從來句讀と對していへる如く「語の絕ゆる處」をいふ語にして即ち文法學上思想の完結せる一體をさすを主とし、又「語意不絕句」と點例にいへるが如く、英語の Clause をもさすものなれば、句論上の單位をさすには最も適せる語なりとす。かくて著者は句は文の素にして文は句の運用に際しての名稱なりとせむとす。

四〇三　一の句とは一の統覺作用によりて組織せられたる言語の發表をいふ。

上にいへる如くなれば我等の日常用ゐる文章談話は一若くは數多の句にて成立するものなり。さてその句の一個體とは何をさすかといふに、從來は「一の主語と一の說明語とを有するものを單文とす」といふが如き定義なりしが、これは主語と說明語との存在する現象をいふに止まり、その二者の結合が、句の主點たるを忘れたるものなれば、句論の研究進行するにつれて種々の破綻を生じてきた說明を加ふべからざる窮地に陷れり。されば、その定義の如きも少くも、

一の句とは主語と述語との結び付けの一回なるものをいふ。

とせざるべからず。即ちこの定義に該當する實例は、

花紅たり。
月清し。
小兒犬と戲る。
我れ庭に梅を植う。

の如きものにしていづれも一の句にして文としては單文たるなり。而して余が下せるかくの如き定義は文學博士芳賀矢一氏著明治文典中の單文の定義に酷似せり。同氏は之を「ウエツチエル」の獨逸文典より取り來られし由なり。著者は明治三十七年以前に日本文法論下卷に於いて之を論ぜり。當時獨逸文典としては僅にハイゼ氏のを有するのみ、苦心慘憺所謂單文といふものの定義の必かくあらざるべからざることを研究し得たり。爾來三四年、その間に世間ありふれの文典が散漫極まりなき定義を以てせるにかかはらず、芳賀博士は、

主語と述語との關係文法上の形式に於いて唯だ一回成立せるものを名づけて單文といふ。といふ定義を下されたり。これ著者の爲には偉大なる援助を與へたるものにして、著者研究の勞空しからずといふべし。但、その後の研究をつゞけをれる余はこれを單文といふことに於いて滿足すること能はずして、之を句と稱せり。かくてその句の研究の進むにつれて、上の定義は叙述をなす體の句の定義には適すれど、すべての句は叙述體のもののみにあらずして主語述語の關係を以て組織せるものにあらぬ句も存すれば、上の定義も亦句全般に對しては不通なり。この故に句の定義は本文の如くいふに止まるのみ。

本文の統覺作用といふは意識の統合作用をさすものにしてその意頗る廣く説明、疑問、命令、感動等の一切の思想を網羅するものなり。さる意の思想活動の唯一回なるものが言語にあらはれたるものを一の句とはいふなり。

四〇四　句はその性質と構造とによりて喚體の句と述體の句との二に大別す。

前にいへる主語と述語との結合はこれ人間の思想の了解作用の必然の現象にして吾人は了解作用に於いては必ず、先その主位と賓位とを分離して考へ、さて後これが一致又は差異を識別して二者を結合して一の命題となす。この論理上の命題は即ち文法學上の一の句たるなり。たとへば、

花は紅なり。
花は紅ならず。

といふが如きこれなり。かく論理學上の命題に似たる形をとれる句は些少の變更を施して、

花は紅なるか。
花は紅ならむ。
花は紅なれ。
花は紅なるかな。

の如く疑問、想像、欲求、命令、感動等をあらはすことを得べし。これらはいづれも主語と述語との一旦の分離と最後の結合との經路を經てなれるものなれば、その根本に於いて論理上の命題と大差なきものなりとす。

論理的の思想にては必ず上の如き二分法をとるべきものなれど、ここに感情、欲求等をあらはす言語發表にして上述の如く、主語述語の區別を立つる形式をとらぬもの存するなり。たとへば、

飛ぶが如くに都へもがな。
妙なる笛の音よ。

の如きは主語述語の區別なくしてしかも吾人は完全に思想を發表しうるなり。かくの如き句は上述の論理上の命題の形をとれるものとは全く形式と性質とを異にせり。從來多くはかくの如きを不完備の句とせり。然れどもこの句には何處にも不完備と認むべき點なくこれはじめよりかの命題とは異なる形と質とを有せる別種の句なりとす。而これ實に感情の發表にしてかの理性の發表とおのづから領域を異にするものなりとす。

この故に句には根本的に上の二種の區別あるたり。その命題の形をとれる句は主語述語の對立ありて、陳述の形式をとれるものなるを以て今之を述體の句といふ。次にその主語述語の區別を立てぬものはその形式呼格の如く喚びかくるさまなるによりて今之を喚體の句といふ。かくて一切の句はこの述體か喚體かのうちに攝せらるるものとす。

文の二大別

四〇五　文法學上の文は之をその構成によりて單文、複文の二に大別す。

前にいへる如く文法學上文の素たるものを句といひ、句を運用したるを文といふ。かくて文は一の句又は多くの句より成ることいふまでもなし。文の構成上、一の句より成る文をば單文といひ、二以上の句よりなる文をば複文と稱す。

さてここに複文といへるは單に二以上の句より成れりといふに止まらずして、それらが、言語上に一定の形式ありて結合せられたるものをさすなり。若し、言語上に形式の拘束なき場合にては、文法學上之を複文と稱することなし。たとへば、

一、皆人は花の衣になりぬなり。苔の袂よかわきだにせよ。

二、秋涼し。手毎にむけや瓜茄子。

三、春日野に今日はなやきそ。若草の妻もこもれり。我もこもれり。

の如き歌俳句は修辭的にいへば、一個體なれど、文法學上にては二又は三の獨立せる單文の集合にすぎず。即ち一、二は二個の單文、三は三個の單文の集合體なるなり。これらを二段落又は三段落の歌又俳句と稱す。これらは單文個々として文法學上の對象たるものなれど、それらの合成體は文法學上の對象とすべきものにあらざるなり。然るに今玆に、

月落ち烏啼く。

月落つれば烏啼く。

の如き文ありとせむに、これらはいづれも形は簡短なれど、

月落つ。　烏啼く。

句論の基礎と極限

修辭的文結合

兩屬連鎖語

といふ二の句よりなり、しかも、上の句の述語が「落ち」「落つれば」の如く形式に變化を起して次の句に連絡するに至れり。かくの如く言語上の拘束を生じて一體となれるときに於いてはじめて文法學上の複文と稱せらるべきものなりとす。この區別は事もなげなる如くなれど、はじめによく之を明にしおかぬ時は末千里の差を生じ、文法學と修辭學との限界もわからぬやうになるなり。これ上の三九九項に既に念を押しおきたる所なり。

四〇六　句論は句を研究の基礎としてその性質、運用を研究し、言語上に制約ある文の結合方式を研究の極限とす。

上來述べたる所によりて句論の出發點と到着點と即ち範圍は明なるに至れりしならむ。今それを約言すること本文の如し。然るに、ここにその言語上に制約ある文の結合方式といふにつきてなほ一言の附加すべきものあり。そは他にあらず。修辭的文結合といふものこれなり。これにとりて二の場合あり。一は互に獨立なる二文の中間に介在する語がそのいづれにも屬するによりて文法上離すべからざる關係を生ずるものにして、

君ならで誰にか見せむ。梅の花。色をも香をも知る人ぞ知る。

（夜や暗き。）道やまどへる。時鳥。わが宿をしもすぎがてになく。

の例に於ける「梅の花」「時鳥」の如きこれなり。これらは上の文にも下の文にも屬するものにして、上下の兩文は本來相互に文法上の關係なき筈のものなれど、この介在せる語が、兩文に共通するが爲に、一體に連絡せられたるなり。かくの如きを修辭的文結合といひ、その介在する語を兩屬連鎖語と稱す。他の一はかの掛詞と稱せらるるものにしてそれ亦獨立たる文をその文成分の音の類似よりして一語を二義に兼ねしめて、

もと文法上關係なき二文を形體上結合したるものなり。

いつか我が身の終なる（以上、一文）

（尾張なる）熱田の八劍伏し拜み汐干に今やなる（以上、一文）

（なる）海渇傾く月に道見えて明けぬくれぬと行く道の末はいづくと問ふ（以上、一文）

（とは）たふみ濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かはれといふ（以上、一文）

（夕）暮の入相なれば今はとて池田の宿に着き給ふ。（以上、一文）

掛詞

これも亦修辭的文結合の一にしてこの掛詞と上の帶屬連鎖語とは意義と職能との差はあれど、修辭的に文を結合する用をなすことは一なり。かくの如きは嚴密にいへば文法學上の問題にあらずといへども、文の形式に拘束を與ふる點に於いては文法學上亦論及すべきものとす。

第四十一章　喚體の句

喚體の句

四〇七　喚體の句は呼格を中心として構成せらるるものにして、一の體言を對象として之に連體格又は特別の助詞を加ふるをその形式とす。

この喚體の句は形式は單純なりといへども、もとより單純なる呼格にあらねば、句としての必要條件をば有す。そは他にあらず、本文にいへる如く、連體格を伴ふか、若くは之に關して必要なる助詞を伴ふかの二者の一なり。この際に於ける連體語又は助詞はこの種の句の成立には必須にして缺くべからざるものにしてそれらの有無は實にその句として完きか完からざるかの區別をあらはすに重大なる關係を有する必要の成分なるなり。

喚體句の二類

四〇八　喚體の句は希望をあらはすものと感動をあらはすものとの二大別あり。

この二別は一は思想の上より一は形式の上より見たる區別にしてその二重の見地よりの區別がおのづから一致して二者の區別を見るに至れるなり。次下に說くを見るべし。

希望の喚體

四〇九　希望をあらはす喚體の句は、その對象たる體言と希望の終助詞「が」「がな」との存在を成立の必要條件とす。

希望をあらはす喚體の句とは、

あはれしりたる人もがな。

の如きものをさす。この場合には「あはれ」及び「しりたる」の連體格の存否は句の成立に大なる價あるにあらず。即ち、

人もがな。

といひても句たることを妨げず。若その助詞「がな」を除き去るときは句たる價値を失ふに至る。この故にこれらの句の成立は體言と「が」「がな」との二の因子に存すと知るべし。

之につきて注意すべきは從來の文法家が希望體といへるものと、これとの差なり。それらの文法家の所謂望體とは、

希君が代は幾久しかれ。
明日は故郷に歸らばや。
鳥も啼かなむ。

の如きをさせるなり。これらは希望をあらはせるは勿論ながら、そは意義上の事にして句の形體の上よりいへば述體にしてただ、それに些少の變形を施したるにすぎず。この故にここにいふ希望の喚體とは性質と構造とを異にするものなりとす。

希望喚體の對象

四一〇　希望喚體の對象たる體言は連體格を伴ふことあり。又準體言を以て對象とすることあり、それに一種の省略を施せるあり、形容詞の連用形複語尾の「ず」にて結體せしめたるを對象とするあり。

ここには希望喚體の對象を說く。これは體言を本體とするものなるが、これに連體格の語を伴ふこと少からず。前項の例に示せる如きこれなるが、なほ、

老いず死なずの藥もが。
君が八千代にあふよしもがな。

の如く種々の形をとれるものを加ふることあり。

又準體言を以て對象とするものとは、

かひがねをさやにも見しが。
いかでこのかく姫を得てしがな。

の如きものにしていつも複語尾「き」の連體形を以てするを特徴とす。さてかくの如きものに一種の省略を施したるものあり。そは

天飛ぶ鳥にも(なりてし)がも。
世の中は常にも(ありにし)がもな。
人の心を枕とも(してし)がな。
飛ぶが如くに都へも(行きにし)がな。

の如き形なるが、いづれも括弧内に示したる如き語を略して「にも」「とも」「へも」等より直ちに「が」「がな」につづけたるものなりとす。

又形容詞の連用形、複語尾の「ず」にて結體せしめたるものを對象とするものあり。それらの例

世の中にさらぬわかれのなくもがな。
いとかく朽木になしはてずもがな。

これらは皆その形を以て其の連語又は句を體言化せしめ、以て希望喚體の對象としたるものなりとす。

感動の喚體

四一一　感動をあらはす喚體の句はその對象たる體言とそれに對する連體格の語との存在を成立の必要條件とす。

感動をあらはす喚體の句とは、

一、あつぱれの武者ぶりかな。
二、きたなきみ方の振舞かな。
三、あな情なの御事や。

感動喚體の對象

四、あゝげにゝ樂しき心よ。

五、あゝ山中の青葉のうつくしさよ。

の如きをさす。これらは多く上に感動副詞を戴き、下に感動の助詞「よ」「かな」等を伴へり。然るに一、二の如きは上に感動副詞なく、三四以下も感動副詞を除きても句として明に意は認めらる。この故にその感動副詞の存在はこの種の句の必要條件にあらざること明なり。又「かな」「や」「よ」等の助詞は上の例にては必要なる部分となせど、又

月の影のさやけさ。

の如きもあれば、それらの助詞も亦かの希望のものよりは遙に必要の度低きものといふべし。之に反してその連體格の語を除く時は句としての存在を失ふに至る。この故にこの種の句には連體格の語の存在を必要條件とはするなり。

從來の文法家。

われはあたたかきこよひの夢に入らむかな。

みるわれさへに心やはらぐよ。

の如きを感動體の文といへり。これらは感動をあらはせるは勿論ながら、そは、義上の事にして句の形體よりいへば、述體にしてただそれに些少の變形を施したるにすぎず。この故にここにいふ感動の喚體とは性質と構造とを異にするものなりとす。

四一二　感動喚體の句の骨子たる對象は本來の體言を主とし、又形容詞に接尾辭「さ」を加へてつくれる體言を多しとし、又稀に副詞に接尾辭「さ」を加へて作れる體言もあり。而、多くはこれらに終助詞「かな」「や」「よ」を添ふ。

その骨子の本來の體言たるものの例。

ありがたの情や。

みかさの山にいでし月かも。

あはれの物や。

流れて早き月日かな。

これらの場合には下に助詞を伴ふを最も普通とす。

形容詞副詞に「さ」を加へて體言としたるものを骨子としたる例。

もれいづる月の影のさやけさ。

毛をふき疵をいふがわりなさ。

ああ山中の青葉のうつくしさよ。

最後の姿を今一目みざりし事のくやしさよ。

いとかく夜をだに明したまはぬ苦しげさよ。

これらは下に助詞なきを普通とすれど、又助詞「よ」を伴ふことあり。

感動喚體の句中の連體格

四一三　感動喚體の句の骨子たる體言を限定する連體格は狀態をあらはす用言、特に多くは形容詞又は副詞を主とし、又體言、準體言を以てするものあり。

本文にいへる如くこの連體格には形容詞を以てするもの多し。而その用ゐらるるに二樣あり。一は語幹を

以てするものにしてその例。

面白の春雨や。
心幼なのわざや。
あた恐ろしの物語や。
かひなのわざや。

の如し。二は連體形を以てするものにして、

きたなきみ方の振舞かな。
たえてつれなき君が心か。

の如きこれなり。

動詞にてのものは連體形を以てするものにして、

心をぬさとくだく旅かな。
ちる花ごとにたぐふ心か。

の如きこれなり。又その連用形を以て體言の資格に立たしめて「の」助詞を添へて用ゐたるあり。

あなしほたれの波のうきねや。

存在詞の類にては連體形を以てす。その例

かこち顔なるわが涙かな。
妙なる笛の音かな。
淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か。

副詞を以てせるものの例。

あはれの物語や。
あつばれの武者振かな。

以上すべてその主體が本來の體言たる時に限るものとす。

體言又は準體言を以て連體格にたたしむるものはその下なる骨子は必ず形容詞副詞に「さ」のつきて成立せる體言たりとす。その體言を以てせるものの例。

もれいづる月の影のさやけさ。
ああ山中の青葉のうつくしさよ。
目にはみえずて音のさやけさ。

これらはその連體格には必ず助詞「の」を伴ふものなり。

その準體言を以てするものの例は、

ささがにの絲をたのめる心細さよ。
よのみじかくてあくるわびしさ。

の如く、助詞を伴はぬものと、

里近くありときつつ見ぬがすべなさ。
毛を吹き疵をいふがわりなさ。
長きよのやみにさへまどはんがやくなさ。

の如く助詞「が」を伴ふものとあり。

感動喚體の成立

四一四　感動喚體の句はその成立よりして二の種類を見る。一は體言を骨子としてそれに連體格の語を冠したるものにして、一は述體にていふ主格にあたるものを連體格とし、述格にあたるものを體言に化せしめたるものなり。

この二者の區別は成立したる後にていはば、全く同一にして體言とその連體格との結合なれど、その成立の方式を異にするによりて分てるなり。而してこの二者の形は前二項を總合して見れば明に認めらるべし。

今この二者の成立に因みて述體の句を喚體の句に變形せしむる方法を說くを得。而してその方法は上に準じて自ら二樣あるを見る。一は述格の語の形と位置とを變じ主格の語の連體格として之に冠するものにして、次の如くするなり。

（君の弓勢は恐し）　あな恐しの君の弓勢や。
　　ああ恐しき君の弓勢かな。

二は主格の語を其のまゝ連體格とし、述格の語を體言に化せしむるものにしてこれはその述語が形容詞なる時に限られたり。上の例の述體に對しては、

君の弓勢の恐しさよ。

といふ形とする如きなり。

口語には喚體なし

四一五　喚體の句は文語にのみ存し、口語には殆ど存せず。

この喚體は古き語法にして現代の口語には殆ど用ゐず。近代の文章にまま用ゐらるるを見れど、殆ど顧みられぬものなり。されど、古代には盛に用ゐられしものなれば、古文學を研究するものにはこれが明なる知識を必要とするなり。

述體の句

第四十二章　述體の句

四一六　述體の句は述格を中心として構成せらるるものにして、主格と述格との對立するを普通の形式とす。

述體の句は論理學上に所謂命題の形式をとれるものにして吾人の思想の了解作用の言語に發表せられたるものなり。この故にこれらは主格と述格との對立と結合とをその成立の條件とするものなり。然るに、主格は本來述格以外のものに對しても用ゐらるるのみならず、時として句中にあらはれざることあるを以て述格を以てその最主要なる骨子とはするなり。これを以て述格を中心とすとはいふなり。

述體句の三別

四一七　述體の句はその述格の態度の如何によりて二に大別す。一は說者自身の思想を單獨にあらはすものにして之を說明體の句といひ、一は說者がある者に對して關係的態度をとれる際の思想をあらはすものにして之を更に命令體、疑問體の二に分つ。

述體の句はその主格述格を有する點よりいへば、別に區分を施すべき餘地なきものなり。然れどもその陳述の態度を見れば、對者を豫想しての陳述と然らぬものとの二者の區別を見る。甲は更に之を區別して命令體、疑問體の二とし、乙は之を說明體と名づく。

説明體

説明體の句の述格

四一八　説明體の句は主語と述語との對立明に認められ、その述語は單なる陳述をなすを普通とす。

説明體の句の例次の如し。

松竹よく榮ゆ。

果肉は味甘く、香氣強し。

白き犬こゝを走りすぎたり。

右の如く事物の説明をなすが故に之を説明體の句とはいふ。而して普通に最も多く用ゐらるるはこの説明體の句なりとす。

四一九　説明體の句の述格は用言の終止形を用ゐるを最根本の形式とし上に特別の係助詞ある時に連體形又は已然形を以てす。

用言の終止形を以て述格の形式とするは説明體の根本形式にして他の二體にはこの形なきなり。

述格の上に係助詞「ぞ」「なむ」の存するときはその述格たる用言は連體形を以て之に應じて終止す。

天下有數の清絶なる松原とぞおぼえし。

子何ぞあらかじめこれが計をなさざる。

ここをなむ蘆の灘とはいひける。

述格の上に係助詞「こそ」の存するときは、その述格たる用言は已然形を以て之に應じて終止す。

御身は不可能の事をこそのぞませたまへ。

説明體の句の述格の助詞にて終るもの

人はかゝる境に立ちてこそはじめてその全能全力を發揮しうるものなれ。

四二〇　説明體の句の述格は助詞にて終るものあり。かく述格の終につく助詞は係助詞、終助詞、間投助詞の大部分之に用ゐらるれども、その述格の成立に有力なるものは係助詞の「ぞ」終助詞の「かな」間投助詞の「よ」の三なり。而してこれらは用言につくことあり。又體言につくことあり。

「ぞ」「かな」「よ」はいづれも用言の連體形に附屬して終止し、

こはげに健全なる村を造るの二要素なるぞや。

しかもこは實に容易ならざる大事なるぞよ。

今は遁れぬ處とおぼゆるぞ。

われはあたゝかきこよひの夢に入らむかな。

興ある事をも承るかな。

みるわれさへに心やはらぐよ。

の如く用ゐられ、又體言に附屬して述格をなす。

われはテ師ぞ。

見る夢のうつつになるはよのつねぞ。

それは無き名ぞ。

これこそは月よ。

疑問體

疑問體の句の述格

汝は平家の侍よな。

四二一　疑問體の句は疑問をあらはすものにして形式に於いて說明體と大差なく、句中に疑問をあらはす副詞又は助詞の存するを特徴とす。

疑問體の句の例次の如し。

春は遂に來らざるか。

吾人は彼によりて何物をか得たる。

榮譽人望はこれを求むべきものか。

汝もまた來れりや。

右の如く疑問をあらはすものにして、疑問の助詞「や」「か」の係としてか結としてか存するを見る。

四二二　疑問體の句の述格は用言にて終る時は連體形を用ゐ、助詞にて終るときは係助詞「ぞ」「や」「か」を用ゐる。

疑問體の句の述格には二樣の組立方あり。一は用言の連體形にて終止するものにしてこの際は上に「ぞ」「や」「か」といふ係助詞あるときに起るものなり。

夜や暗き。道やまどへる。

何ぞその言の悲痛なる。

梅白し昨日や鶴を盜まれし。

大氣はしかく清朗なり。何ものか予の心を憂らしむる。

一は助詞を述語の終に附するものにしてこの際には「や」は用言の終止形に、「か」「ぞ」は用言の連體形又は體言に附して述格をなす。

夜半の鐘聲の舊によりて客船に到るもの有りや無しや。

われ御身の爲に一曲を奏づべきか。

それは人の使か己れの言葉か。

御身は何人にてましますぞや。

汝は何者ぞ。

その間國を建つる者幾何ぞ。

右のうち「ぞ」を用ゐるものは必ずその上に疑問の意をあらはす代名詞副詞等の存すべきものとす。その他にも往々それらを伴ふことあり。

四二三　說明體の句、疑問體の句を通じて係助詞が、述格の上にあるときその述格に立てる用言をその係助詞の區別に應じて或は終止形を以て或は連體形を以て或は已然形を以て終止とするを法とす。この法則を係結と稱す。

係結とは係助詞とそれに應ずる述格たる用言の活用形との間に生ずる一定の約束をいふ。卽ち、係助詞「は」「も」に對しては終止形を以て之に應じ、「ぞ」「なむ」「や」「か」に對しては連體形を以て之に應じ、「こそ」に對しては已然形を以て之に應ずるをいふ。

本書に說ける如くすれば、係結などいふことくしき事いはずして、その實體は十分に會得せらるべし。

元來係結といふことの眞價は詞の玉緒の眞意の誤解せられたりしが爲に殆ど世に知る人なかりき。それらの事は既に係助詞の條に說けり。口語にてはこの係結の法則の現象の特別なる場合は殆どなくなれり。然れど鳥取縣などにはなほ「こそ」に對しての終止として已然形を用ゐる如き現象あり。

命令體

命令體の句の述格

四二四　命令體の句は命令又は禁制の意をあらはすものにして往々主語をあらはさず、その述語は命令形又は禁制の意の助詞を有す。

命令體の句の例次の如し。

人々これを誤ることなかれ。

汝曹飮んで之を受けよ。

冬寒くとも寒しといふな。火鉢にあたるな。

四二五　命令體の句の述格は動詞存在詞及び複語尾の命令形又はそれら命令形を有する用言に係助詞「な」を添へて用ゐるものとす。

命令體の句は命令をあらはすと、禁制をあらはすとの二樣あり。その命令はすべて本文にいへる如く命令形にてあらはす。その例

はや木高かれ。

汝をして少しく之を說くを得しめよ。

禁制は之をあらはす方法三あり。

一は、打消の意味ある動詞な存詞の命令形にてあらはす。

二は、禁止の助詞「な」を終止と一てあらはす。

三は、なその格にてあらはす。（古風の用法なり。）

人の惡をいふことなかれ。

めゝしきことのたまふな。

門をな開かれ候ひそ。

述體を人稱より分つこと

四二六　述體の句をその主格の態度より區別して第一人稱の句、第二人稱の句第三人稱の句の三とす。

第一人稱の句

第二人稱の句

述體の句は主格と述格との對立をその主たる形式とするものなるが、述格の態度につきて分てば上來述べたる三種となり、主格につきて區別すれば本文の如く三に區別するを得べし。さてかく三に區別するにつきてはそれぞれ主格の發現に特別の現象あるのみならず、上述の三體とも關聯するところあるなり。次に之を述べむ。

第一人稱の句にては主格は說者自身なれば特に必要なき限りは之を略して句中にあらはさざることあり。

明日參上致しませう。

而してこの稱の句は、主として說明體にして稀に疑問體なることあり。

我は今より何をなすべきか。

第二人稱の句は疑問體又は命令體なるを多しとす。

汝は之を忘れたるか。

汝はかしこに行け。

而してその主格は對者たるを普通とす。その主格に立てる對者は上の如く之をあらはすこともあれど、命令體にありては多くは略してあらはさぬこと次の例の如くす。

かしこに行け。

人に語るな。

或は又その對者を呼格としてあらはすことあり。この時は疑問體にては、

少納言よ。香爐峯の雪はいかならむ。

の如く對者を呼格として、別に疑問體の句をあらはすものなれど、命令體にては、

我が友よ。かしこに行け。

の如く對者が本來主格に立つべきを呼格にせるによりて別に主格の存せざるを常とす。

第三人稱の句は第一人稱と同じく說明體を主として、稀に疑問體なることあり。その例

彼は遂に來らざりしか。

而して、この類の句にては客觀的なるが故に著しく明ならぬ限りは主格の省略せらるることなし。

第四十三章　句の複雜なる構成

四二七　述體の句は述語を中心とし、喚體の句は呼格を中心として成立するものなるがそれらはそれぞれ必要に應じて主格、補格、連體格、修飾格を句中に伴

ひてあらはるるなり。

喚體述體の二の句の構成の基礎的事實は既に前二章に說けり。この章にはそれより進んで一層複雜なる構成をなせるものを說かんとす。而してその本文にいへる主格以下の事は既に屢述べたれば、ここに再び說かず。それ以外の事を述ぶべきが、その複雜なる構成のものは主として述體にあらはるるが故に以下說く所は又大部分は述體句に關すと知るべし。

四二八　體言を以てする位格、卽ち主格、補格、賓格、連體格は一の語よりなるに止まらず、多數の語より成ることあり。而これらはそのまま重ぬると、接續副詞助詞等にて結合せるものとあり。

そのまま重ねたるものの例。

東西には稻荷、祇園、松尾、大原野等光を雙べて日夜に詰番し禁闕を守り給ふ。

先渡邊黨には省播磨次郎、授薩摩兵衞、連源太、與右馬允、競瀧口、丁七唱を始めとして二百騎ばかりなり。

和漢の先蹤、朝庭の禮節には似も似ぬ事なれば。

その時の鉢木は梅松櫻にてありしよな。

夜討などいふ事汝等が同士軍十騎二十騎の事なり。

琵琶に流泉啄木の曲あり。

接續副詞又は之に準ずるものにて結合せるものの例。

松竹及び梅は正月の飾となる。
支那並に朝鮮を救ふ。
松或は竹を立つ。
山又山を打ち越えて。
鯨は魚類若くは獸類なるべし。

助詞にて結合せるものの例。この時の助詞は「と」「や」「か」なり。

上杉謙信と武田信玄とは戰國時代の二傑なり。
梅と蘭と菊と水仙とを四君子と稱す。
柚や梨やなどをもちてくひなどす。
雨か雪かの降り來らむさまなり。
これを兄か姉かに贈らむと思ふ。
余が親友は君と乙君となり。
鯨は獸類か魚類かなり。
みすと几帳との中に入れて。
伊勢や日向の物語。
狐か狸かの所爲ならむ。

四二九　用言を以てする連體格及び準體言にも亦多くの用言を以て一の位格をなすことあり。この際にはその上なるものは連用形をとりて連なるものにして、準體言にては中間に接續副詞を加ふることあり。

連體格に於けるものの例。
赤く白き花とも。
「なり」の附屬せる者は更に次の如く重ぬることあり。
美麗に廣大なる公園。　美麗にして廣大なる公園。
準體言に於けるものの例。
不義にして富み且つ貴きは浮雲の如し。
この道を行き又かへるは誰なるか。

上二項に說けるはすべて一の位格を多數の語にて組織せるものにして次の四三一項に、說けるものとは性質を異にするを注意すべし。從來の文法家は單文は一の主語と一の述語とよりなると定義を下したるが爲に上二項に說くが如きをば、單文にあらずとし、多くの單文の結合よりなるとせり。然れども、

蕭何、張良、韓信を漢の三傑といふ。

といふが如き句は之を三の句に分解するを得べからず。又かの軍隊の如く上は司令官より下は一卒に至るまでを網羅して一隊をなす場合にはその主格又は補格には計何萬何千人かの名の存すべきものにあらずや。かくの如きものも亦その何萬何千かの句の結合といふべきか。世、豈にかかる僞論あらむや。かくの如きに至るは皆そのはじめに單文卽ち句の定義を嚴密に審定せざるに基づき、終に自縄自縛の窮地に陷れるなり。吾人が上の四〇三項の句の定義は卽ちこれらの弊を救濟するに足らむ。學者再三熟考するを要す。

四三〇　一の述格も亦多くの語を以てなることあり。この時は用言のは連

用形を以て之を重ね、若くは終止形のまま、之を重ぬ。その助詞にて終れるものも、亦之を重ぬ。かくてその重ぬる中間に接續副詞又は之に準ずべきものを介することあり。

連用形を以て重ねたるものの例。

淵の水清く深し。

大夫黒といふ馬こそ太く逞しけれ。

雷電光りはためく。

人々踊り且つ走る。

この畫はははでやかにしてしかも高尚なり。

この事實に慿すべく又學ぶべし。

終止形又助詞の附せるまま重ねたるものの例。

かくて彼はうたひつ、まひつ。

ことごとしきしらべもなしやしどけなしや。

この書はよきかあしきか。

汝は之を好むか否か。

汝は之を好むかはた好まざるか。

四三一　一の句中に主格又は補格が二個以上並び存することあり。この際

にはそれらはいづれも助詞もを添へて示さる。

主格の數多きものの例。

英國人も米國人も露西亞人も此國の人には及ばず。

君も僕もかの人をよく知れり。

これやこの行くもかへるも別れつつ、るも知らぬもあふさかのせき。

補格の數多き例。

余は月をも花をもう愛す。

人をも身をもうらみざらまし。

春雪峯にも尾にも立つ。

金剛石は鐵よりも水晶よりもかたし。

これを君とも親とも賴み奉らむ。

前へも後へも行くこと難し。

この項に說けるものは前三項に說けると趣を異にす。卽ち前のは一の位格内に語の多く存するなり。後のは同一の位格の多きなり。之を人力車にたとふれば、前のは二人乘の車一輛に二人のれるなり。後のは一人乘の車二輛なり。この差をよく辨ふべきなり。而してそれらの例は、從來の文法家はまた多數の單文の縮約なりとせり。されどその事の通ぜぬことは、上の例どもとそれらをそれぞれの單文に分ちたるものとを試みに比較して果してそれらの合成なりや否やを熟思せばその誤なるは直ちにさとらるべし。

四三二　一の體言に對して二以上の連體格の並び存することあり。これら

副主格副補格

副格

はそのまま重ぬるものとす。

それらの例。

古の今の古き新しき歌えりとゝのへさせ給ふ。

この五十貫の錢。

打ちたる白き狩衣。

これらは個々に下なる體言を限定するものにして、四二九項にいへる連用形を以て重ねたるものとは資格異なり。かれは二者合して一の連體格に立てるものにして、これは同資格を以て並列せるものなればなり。

四三三　一の句中に主格又は補格の二以上存し、その一は全體をあらはし、他はその部分をあらはすことあり。この場合にその全體をあらはせるものは本來の主格又は補格にして、部分をあらはせるものを副主格、副補格といひ總稱して副格ともいふ。

主格に於けるものの例。

唐の物は藥の外は無くとも事かゝず。

象は體大なり。

彼は兩眼盲せり。

この人は年老いたり。

補格に於けるものの例。

人つく牛をば角をきり、人くふ馬をば耳をきる。

罪重き者をば首を斬る。

今昔天竺に深き山の洞に一の獅子住みけり。

河内と大和との境に金剛山といふ處に城をかまへて。

一枝を折る者は一指を斬らむ。

朱雀院天皇の御時に承平年中に將門が謀叛の事はありしなり。

これらはその本主格本補格と副格との間に主從の關係を有するものにしてかの四三二項の並列の關係を有するものと相對して、かの複合方式の二者をここに表明せり。從來この全と分との關係を主格にのみ認め、その本主格をば總主格などいへり。然れどもこれは主格にのみ存するにあらぬこと上の例にても見らるべく、總主語といふ名目を立てば總補語總客語などいふ名目をも立つべきに至らむ。それらの詳細は日本文法論に說きたるを以て今略す。しかもなほその總主格などの名目は不當なるなり。その故はこれらの本來の主格補格はその全體をあらはすものに存すれば、若し、特別の名稱を加へむとせば、下なる部分を示すものに加ふべきに、本來の主格補格に總字を冠し、部分のものをそのままにさしおくは本末顚倒なりといふべし。この故に本書にはその部分のものに副字を冠して根本の主格補格と別あることを示すこととせり。

四三四　一の句中に於いて主格又は補格に對して同等の意義又は資格ある語を上に重ね用ゐることあり。この時はその下なる語を本來の主格又は補格とし、上なる語をそれの同格語といふ。

提示語

その例次の如し。

贈太政大臣菅原道眞公は北野に祭られたまふ。

鎭西八郎爲朝を召させたまふ。

右大臣實朝公に上る。

日本第一の名山富士山に上つた。

これらの上なる語は卽ち同格語たるなり。又この二語の間に「卽ち」といふ副詞を加へてこれを結合することあり。

蜂は護身の器卽ち螫を有す。

十寸卽ち一尺あり。

これらは同等の位格の多くあるうちにて一致組織をとれるものにして、上の四三一項及び前項のものと相對立せるものなりとす。

四三五　句の中のある語に思想の主力を注げるものは、之を特に句の先頭に提げ示すことあり。この語を提示語といふ。提示語は下の句と形の上に連絡あるあり、なきあり。いづれも下なる句に必ず之を代表すべき代名詞を有す。

提示語の句頭に獨立して示されたるものは之を獨立提示語といふ。その例

不忍の池詩人は之を小西湖といふ。

林、高山、蒲生、この三人を寛政の三奇士と稱す。

再歸法

凡古言を解せむと心がくる者誰れか五十音の反切によらずして釋し得らるべき。

提示語の獨立の形をとらず、助詞特に「は」によりて形體上の連絡をとりつつ句頭にあるものは之を連絡提示語といふ。その例

大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治したまふ。

君の令名は余夙に之を聞けり。

机は之を木にてつくる。

すべて以上の場合にはその本の句中にその提示語を代表すべき代名詞存す。かくの如き代名詞をば再歸法に立てるものと稱す。

この提示語は國語に頻繁に用ゐらるるものにして、思想上最も重きを置く點なれば、往々主格と混同せられ易し。

接續語

四三六　句は上の他の句との意義上の連絡を示す必要よりして、頭に接續語をおくことあり。

接續語は接續副詞及び之に準ずるものを以てするものにして、その句の組織外にありて、上下の意を媒介するものなり。然れども、その所屬は下の句に存す。

その例

然れども余は一々之を駁する愚をなさず。

但し婦人はこの限にあらず。

第四十四章　句中に於ける語の配列

四三七　用言の本原の語尾の次に複語尾あり、複語尾多數つづくときは又所定の順序に從ふべきが如く、國語にて句をなす時には語の配列に一定の順序あり。

複語尾の位置

用言の本原の語尾の次に複語尾來り、しかも各複語尾はそれ〳〵所屬の活用形を有すること、又それらに他の複語尾のつづく際にはその法則一定し、而してその中間に他の語を容れず一連續體をなすものなることは既に、第三十八章に說けるところなり。かく語の用法には一定の連續あるものなれば、この研究は決して忽諸に附すべきにあらず。卽ち語句の配列には一定の法則あるなり。今この章にては主として一の句を組織する素材につきて說かむとす。

助詞の位置

語句の順序はいづれの國語にありてもそれ〳〵の法則あるものなり。この故にこの知識は文法上甚重要なるものなり。而して、國民としては殆この知識を要せずとも誤らざる如く、普通になりをれども、外國人などはこの知識收得の上に大なる苦心を要するものなり。

四三八　すべて助詞はその助くる語の下にありて離るることなきものとす。

我は汝を愛す。

雲きたれども、雨とならず。

助詞のその助くる單語の下にありて離るゝことなきは若し他の單語の下に行くときはそれを助くることとなればなり。

資格の位置

連體格の位置

四三九　資格はすべてその用言の直上にありて離るることなきを原則とす。上のうち形容詞「如し」の資格は決して離ることなきなり。

飛沫は霧の如し。

その禮儀は至つて正しきが如し。

「なり」「たり」の資格も亦決して離ることなし。然れども時としてその助詞「に」「と」と「あり」とに分離せしむることあり。その時には中間に副助詞係助詞及び間投助詞「し」等を容るることあり。

靜かなり。　靜かにたにあらば。　靜かにこそあれ。

「す」の資格は時として、その中間に格助詞「を」を加ふることあり。

勉強す。　勉強をす。

四四〇　連體格の語はすべてその所屬の體言の直上にあるを本則とす。

その例。

資本は貯蓄の結果なり。

異なる鄕の珍らしき花禽を目にす。

一世を驚かすの事業を成し遂げむと心がけたり。

多數の連體格並び存するときはそれらを對手たる體言の上に重ね、その間にまた他の語の介在するを許さず。四三二項を參照せよ。

感動副詞を介む連體格

四四一　體言よりなる連體格は時として下なる體言との間に感動副詞を介むことあり。

夜明けて後にはういの「八郎のいで矢目見む」といはむには何とか、其の時答ふべき。（保元、二）

この例にては普通ならば、

いで八郎の矢目見む。

といふべきを、「八郎」に力をこめていへるが爲にかかる語法をとれるものなるが、かくの如きはただ感動副詞の加はる際にのみ起る現象なりとす。

補格の位置

四四二　補格はその所屬の用言の上にあるものとす。補格二以上ある時はその上下に一定の法則なし。

それらの例。

君幼より聰敏にして專ら學問を好み、德性を養へり。

所は海に近くて山に遠し。

大旱にも河川を涸らすに足らず、

子に讓れる財產。

補格は用言に附屬するものなれば、その用言が述格に立つときも準體言たる時も連體格に立つときも伴はるるものにしその上にあるを通規とす。而補格が二以上ある時はそれらの上下は心理上の輕重による外、何等の法則もなし。

連體語、準體言の補格

彼はその子に身代を讓りたり。

教師生徒に字を教ふ。

四四三　準體言又連體語に用ゐられたる用言の補格は必ずその所屬用言の上にありて離れず、決して下に在ることなし。

これは下にいふ句の述格に立てる用言の補格とやゝ性質を異にするを以て先づ之を說けるなり。その例

彼は實に今その手腕を試みむとする者なり。

彼は師より受けし教訓をよく守れり。

德に報ゆるには德を以てす。

これらの場合にその補格の語がその用言と離れて下に行かむか、もはやその補格の意義と職能とを有せざるに至るを見るべし。

程度の修飾語の位置

四四四　程度を示す修飾格の語はその對手たる語の直上にありて、離れ又は下にあることなし。

程度を示す修飾格は、屬性に對してその程度を示すものにして、主として用言に、又副詞に時として體言をも限定す。いづれにしてもそれらの直上にあるを本則とす。その例

漁業を以て生活する者頗る多し。

松もまた甚だ稀なり。

いと遙かに見ゆ。

情態の修飾格の位置

やゝ靜かになれり。
是眞の最長ずる所は蒔繪にあり。
頗る感ずべき行なり。
唯半日の路ぞかし。
稍西の方にあたりて見ゆ。

四四五　情態の修飾格はその對手たる用言の直上にあるを通規とし、若し、その用言に補格の存するときはその補格の上にあるを普通とす。

この類の修飾格は用言の屬性を修飾するものなれば、その對手たる用言が述格に立てる時にも連體格に立てる時にも、亦準體言たる時にも附屬しうべきものにしてそれらの直上にあるを本則とす。然れども、若しその用言に補格存するときは上にもいへる如く用言は補格の一部分とも見るべきものなれば、修飾格はその補格の上にあるを本則とするなり。これらの例

國内おほかた佛軍の馬蹄に蹂躙せられたり。
椿はぼたりぼたり落ち落ちて地も紅なり。
北風颯々鬢を吹きステツキ持つ手もかゞまむとす。
何はさておきまづ學問を心がくるを要す。
おほかたにおく白露。
たけのすらすらと高き人。
かの遙に見ゆるは鶺鳥なり。

主格と述格との通常の位置

徐に車をやるもあり、あわただしく馬を馳するもあり。
その禮儀は至つて正しきが如し。

この類の修飾格は用言の屬性に關するものにしていつもその用言の上にあるを原則とす。まゝ遊離することありても他の用言の上に至ることなし。即ちその範圍は、

用言……情態の修飾格――用言

の如き形式をとるものとす。されど、

何はさておきまづ學問を心がくるを要す。

の如き場合の「まづ」は「要す」に關せるものにして「學問を心がくる」に關することなし。こは「學問を心がくる」が準體言となりて「要す」の補格に立てるが故なり。

四四六　述體の句にありては主格は先頭に述格は最後に來るを通規とす。隨つて補格はそれらの中間にあるものとす。

それらの例。

月清し。
菊の花さきたりき。
政府は紙幣を發行す。
彼は身代をその子に讓りたり。
古の名將は士卒と艱苦を同じくす。

陳述の修飾格の位置

四四七　陳述の修飾格は用言が述格に立てる場合にのみ修飾するものにして、その用言の属性に關しての補格修飾格あるときはそれらの上に位するを本則とす。

陳述の修飾格は述格に對するものなれば述體の句にのみ存するものなり。而して用言の屬性に關する補格修飾格はその用言の意義の擴張に過ぎざるものにしてそれらを一括してこの修飾格は修飾するが故にそれらの上にあるを本則とす。上述の如くなれば、この修飾格は述體句の主語の直下にあるを常規とす。

何故にわれをして久しく床に眠らしめたるか。

世人もし之を疑はゞ還くその證據を求むるに及ばず。

これ蓋し前述の理由によるものならむ。

我らはここにたとひいかなる辛苦艱難にあふとも、よくこれに堪へて最後の成功を期せざるべからず。

主格、述格、補格、述格の特別の位置

四四八　述體の句に於ける主格と補格と述格との位置は時によりて顚倒せらるることあり。

本文にいへる位置の顚倒とは、主格を述格の下に持ち來すこと、補格を主格の上又は述格の下に持すことをいふ。それらの例

主格を述格の下に持ち來せるもの。

美なるかな、山河。

早返りたまふか、君は。

かねてぞみゆる、君が千歳は。

補格を主格の上に持ち來せるもの。

何事をいかなるものがかきたるやらむ。

降る雪にきこりの道もうもれけり。

この事を誰に汝は語りしぞ。

補格を述格の下に持ち來せるもの。

誰か知らん、遠征の志を。

知るべし、松が民人の性情を感化するの極めて大なるを。

請ふ、賛成あらむことを。

又次の如く述格の下に主格補格を持ち來せるあり。

とへかし、人の花の盛りを。

修飾格の特別の位置

かかる位置の變更は心理的傾向によりて、その最も力をこめたる點をはじめに持來したるものにして、これらの組織によれるものは強き主張をなすもの、又は感情を強くあらはすものに多く、歌謡、美文に最も多く用ゐらる。

四四九　述體の句に於ける陳述の修飾格は多くは主格の上に持ち來さることあり。又それらの句に於ける情態の修飾格は主格の上又は述語の下に持ち來さることあり。

述格の下におく連體格

陳述の修飾格の主格の上にあるものの例。

げに品性は何者よりも必要なりといふべし。

蓋しこれ實に最難事ならん。

この類の修飾格は述格の下に來ることなし。

情態の修飾格の主格の上にあるものの例。

胸中おのつから閑日月あらむ。

早くも旭日の御旗ひるがへりぬ。

その述格の下にあるものの例。

我も行かむ、まて、しばし。

急げ、とくとく。

我は防がむ、力の限り。

これらはすべてその語に特に力をこめて示すものにして文勢を張る必要より來れるなり。

四五〇　述體の句にありては時として體言よりなれる連體格をば述格の下に持來すことあり。

その例。

浪の文織れ、唐の大和の。

これが母です、私の。

かくの如きことの起るは體言に「の」の附屬せるものに限れり。これらは四四一項の場合と性質を同じくするものなり。參照すべし。

句の修飾格の位置

四五一　句の修飾格は句の頭に置かるることを通規とす。然れども時として句の末に持ち來たさるることあり。

これらは接續の意のものと、感動のものとあること既に述べたり。この句頭にある例。

かくて、彼は之を横濱へ輸出せり。

いざ、あすは故郷へかへらむ。

あはれ、今年の秋もいぬめり。

この句末にある例。

主定まらぬ戀せらる。はた。

我は行かむ、いざ。

君は來たのか。また。

呼格の位置

四五二　呼格は句の頭に置かるるを通規とす。然れども時としては句の末に持ち來たさるることあり。

句頭にある呼格の例。

少納言よ。香爐峯の雪はいかならむ。

あが君や。をさなの物いひや。

苔の袂よ。かわきだにせよ。

句尾にある呼格の例。
來れ。我が友。
あれは何ですか。君。
いざ給へ、浴に。大夫どの。
こらまて。ねざり。

語法の相關

第四十五章　句中に於ける語法の相關

敬語の相關

四五三　句を構成する素材中、他と相待ちてはじめてその用を正しくあらはすものあり。之を語法の相關と名づく。この相關は敬語の用法と、陳述の修飾格の用法とに著しくあらはる。

語法の相關とはその語の用法が、文法學上の法則として見らるべきものに限りていふ名目にして修辭上論理上なほ語の用法の相關狀態は存するは明なれど、それらは文法學上の法則とするに足らねば、今は上の二につきて述べむとす。

四五四　敬語は句の人稱の區別に大なる關係あり。卽ち第一人稱の句にては謙稱を用ゐ、第二人稱の句にては對稱の敬語を用ゐ、第三人稱の句にては一般の敬稱を用ゐるを原則とす。

本文は敬語を用ゐる際の事をいへるものなれば、敬語を用ゐざるそれらの句に對しては何等關係なき事なりとす。

第一人稱の句の敬語

四五五　第一人稱の句の敬語には述格に謙稱の動詞を用ゐる。その句中の第一人稱及び之に關するものには謙稱の名詞又は動詞を用ゐ、第二人稱、第三人稱に關するものには敬稱を用ゐることあり。

それらの例。（‖は謙稱—は敬稱）
世は思ひの外なるものと思ひ侍りぬる。
かゝる御事をみたまふるにつけて。
君に供奉し奉る。
わらはこそ參りて候へ。
抑淨土宗ノ事ハ俊寛未タ心得ズ侍リ。
四月二十二日當小笠原島に到著仕候。
小生貴宅へ伺ひ申すべく候ふ。
僕が君の內へゆきます。
私は明日橫濱へ參ります。
これは淀邊に住居致す者でござる。
大さう長くお待たせ申しました。

第二人稱の句の敬語

四五六　第二人稱の句の敬語には述格に敬稱の動詞又は敬語の複語尾若く

はそれらの動詞に更に謙稱の動詞を加ふることあり。而この句中の主格呼格を對稱の敬稱にてあらはすことあり。又その他の各稱格に關する敬語は第一人稱の句に同じ。

第三人稱の句の敬語の第一種

それらの例。（＝は敬稱―は謙稱）

いかに佐々木殿、おくれおはし給ふぞ。
今生後世憑みまゐらせ候はむ。
この品貴下に進上仕るべく候ふ。
この事貴兄は如何思召され候ふか。
殿下、御機嫌麗しくあられます。
あなたはかやうにあそばせ。
これを貴君に差し上げます。
もしあなたこちらへ入らつしやつて下さいまし。

四五七　第三人稱の句の敬語には二樣の狀態あり。一はその主格を尊敬していふときにあらはるるものにして、その述格及び句中にあらはるる稱格につきては第二人稱の句の敬語におなじ。

それらの例。（＝は敬稱―は謙稱）

元弘の亂に後醍醐天皇隱岐國へ遷されさせ給ふ。

第三人稱の句の敬語の第二種

當時天皇神泉苑に行幸ありて群臣をして詩歌を献ぜしめらる。
殿下は御課業了らせられて雪中に還啓あらせられぬ。
いよいよ殿下保育の事を厚く任じたまふ。
武田先生も御臨席下さるべく候ふ。
おかあさんはあすこに入らつしやるよ。
あの方もさやうに仰せられました。
お孃樣は御部屋で御勉強でございます。

四五八　第三人稱の句の敬語の他の一種は、その主格に特に尊敬の意を加ふることなき場合にして、その述格に第一人稱の句の如く謙稱の動詞を用ゐる。この際句中に第一人稱のあらはるる際に往々謙稱を用ゐる。

それらの例。

その日は實に天氣麗しく有之候ふ。
その塔は甚だ見事に候ふ。
あれは私のでございます。
そこに學校がございます。
御飯を戴く。
家内がさう申しました。

虹ができました。

これらは從來の文法家には丁寧にいふものとせられたり。總じて從來の文法家敬語につきてはただ單語をしかも、その意義を說くに止まりて之が句又は文中に使用せらるる方法を說かずしてしかも敬語法といふことを喋々せり。されど、それらの諸家の說ける所にいかなる法則の存せるか。實に敬語法といふ以上そこに一定の法則なからずばあらず。本書に說く所はなほ未だ盡さざる處あるのみならず、十分に之を說くべき餘裕なきを以てこれが略說に止むといへども、しかも、これ恐らくは敬語の法則をわが文法學に樹立せるものの嚆矢なるべきか。

陳述の修飾格と述格との相關

四五九　陳述の修飾格は述格に對して一定の約束存す。

これらの修飾格の詳細は第十七章の一八三項乃至一八六項並に第二十五章の三五二項を參照すべし。

その述格にあらはるるものは次に大略をあぐべし。

述格の必肯定なるべきもの。

げにも仰の如くに候ふ。
まことにこの夢見合せらるる入道の心中なり。
うべ山風を嵐といふらむ。
實に御尤の御話です。
まことに恐れ入りました。

述格の否說なるべきもの。形容詞の「なし」か打消の複語尾又禁止の助詞「な」を要す。

天使五たび來るといへどもあへて隨ひ給はず。
ちるをばえこそ止めざりけれ。
さやう　事は更に存知仕らず候ふ。
をさをさ立ちおくれず。
人はいさ心もしらず。
ゆめゆめ疎略を存せず。
ゆめな語りそ。
さらさら厭ふべき事にあらず。
ちつとも知らぬ事だ。
さらに承知仕らず候ふ。

述格の決意を示すもの。

人生志を得ばすべからく懽をつくすべし。
必ず、これを行はむ。
是非御目にかかりたく候ふ。
きつと面白いに相違ない。

述格の想像又は疑惑をあらはすべきもの。

明日は多分天氣よからむ。
この說益し眞に近からむ。
恐らくはかの說眞に近からむ。

もしかの尋ぬる人にやあらむ。
よもや恐れはすまい。
おほかたそんな事だらう。
あの人にはとても出來まい。
或はさういふ事もあらう。
述格が反語をなすべきもの。
豈に他あらむや。
風浪何ぞ恐るるに足らむや。
身不肖なりといへどもいかでか彼に劣るべき。
なんでまけるものか。
どうしてそんな事ができませうか。
述格が禁制の意をあらはすべきもの。
ゆめゆめ忘るることなかれ。
決して過度の勉強をばしたまふな。
述格か希望の意をあらはすべきもの。
いかで見せ奉りにしがな。
願はくは花の下にてわれ死なむ。
何とぞ御乘車下されたし。

どうぞ御出で下さい。
述格が詰問の意をあらはすべきもの。
一公など我宿に一聲もせぬ。
秋の蟲なにわびしらに聲のする。
なぞ世の中の玉櫻なる。
なせこういふ事をしたか。
述格が假設假容をあらはすべきもの。
若し天氣よくば散歩せむ。
たとひ千騎もあれ萬騎もあれ、一方は蹴け破らむずるぞ。
たとひうれへ侍りとも何の悔か侍らむ。
もしそんな事があつたとしても、私は見捨てない。
たとひどんな事があらうとも、志をかへる事はあるまい。
この最後のものはその句が、必ず下の句の條件をなすものなり。

四六〇　係結の法も亦語法相關の一なり。
これは四二三項に說きたれば今說かず。

第四十六章　單文

四六一　一の句より成れる文を單文といふ。

單文は單句文の義にして一の句より成り、一の句とは統覺作用の一回の活動の言語にあらはれたるものなり。されば、單文といふには、一の位格内の語の數の多少、又種々の位格の數の多少は關係する處なし。今次の如き文ありとせむに、

西鄉隆盛、大久保利通、木戸孝允は即、維新の三傑なり。

この文には主格に名詞三を有すれど、一團をなして一の主格をなせるものにして文を三に分つべからざるなり。又、

彼はあまりの樂しさに歌ひ、舞ひ、踊り、狂へり。

といへる文にては述格のうちに動詞四を有す。從來はかくの如きものを以て多數の單文を縮め合せたるものとせり。されど、これも上の三傑の文と同樣にして四の文に、分ち得べきものにあらず。即ち「歌ひ、舞ひ、踊り、狂ふ」は區々に行はるゝにあらずして、一の源因よりして一の場所に於いて一の時に一の動作として起れるものにして唯吾人が、之を語る爲めに四の動詞を用ゐたるに過ぎず。若し單文とは一の用言を以て述語となすものなりなどいふことにせば、この文の如きは「歌ふ」「舞ふ」「踊る」「狂ふ」の四動作を別々にあらはすにすぎずして混成的の一動作をあらはすこと能はざるに至らむ。この故に、單文といふ事の上には主格又は述格内の單語の數の多少は要件たらざるものと知るべし。又次の如き例は、

友も我も痛く疲れて砂の上に坐せり。

潮はいよいよ川に滿ち、殘照を浮べ、青靄の影を載せ、白き泡を運び、愛々として、まさに板橋を侵さむとす。

内省疚しからざる如き、屋漏に愧ぢざるが如き皆これ誠なり。

主格、補格、提示語等が多數あれど、いづれも單文たるに妨げなきものなること既にいひたるところなり。

單文とは上にもいへる如く單句文といふ義にして一の句よりなれるものをさせり。即、句とは文の成素をさす名なりと知るべし。かくする時は、即、「一の句」とは化學上の所謂「元素」の如き概念にして文は即、化學上の所謂物體に該當する概念なり。物體に一元素よりなる單體、二元素以上よりなる混合體、化合體あるが如く、文にも單文、重文、合文等ありといふをうべし。

四六二　單文の體はその句の體に基づき、喚體、說明體、疑問體、命令體等の區別をなすを得べし。

四六三　說明體の單文は之に感動的調子を添ふる時その述語に感動の意ある助詞よ、かな等を添ふるあり。又之を以て義務を示して事實上命令を示し、或は又問題を提示することをう。

本項以下は、文の區別はその組織によるものにして必ずしも用法によるにあらざることを示す。而この項は說明體につきてとく。從來の文法家、

われはあたゝかきこよひの夢に入らむかな。

みるわれさへに心やはらぐよ。

の如きものを感動體の文といへり。しかれども、これらは體としてはなほ說明體といふべきものなり。若しかくの如きものを感動體といはゞすべての說明體はみな、僅に感動の助詞をとるによりて感動體に變化しうべし。されど文の性質上の區別はかくの如き淺薄なるものにあらず。先づ見よ、從來のすべての文法家一と

して著者が第四十一章にあげし如き感動喚體の實例を說明しえざるにあらずや。これらの文は述體よりいへば完全なる體を具へをるものにあらずして、感動の主體ありてこれを修飾する連體格を有するものなり。かくの如きは他のすべてのものと異なりて所謂主格述格の形式によらずして連體語と體言との形式をとれり。さて、これらの文は從來の文法家には文とも、句とも名づけられざるものにして之を放棄しおくべき筈のものなるに、なほ之を放棄しおくこと能はず（勿論放棄せらるべきものにあらず）して矛盾を感じながら感動體の文のうちに入れおけり。然れども、その說明及び定義は何等の場合にもこれに及ぶことなし。奇怪なりといふべし。著者の研究によれば、これら即ち感動體と稱せらるべき實體にしてここにいへるものの如きは、感動を寓せられたる說明體にすぎず。著者の日本文法論においてこれらの誤を訂して古今の蒙を啓けり。論ずる所甚長くして到底こゝにその梗概をだにあぐるにたへず。この故にたゞ本項の所說につきて一言するに止む。

命令體の文につきても近來誤まれる說を傳ふるものあり。卽、「べし」を以て命令の助動詞となし（これ誤なり）これが述語に附屬せるものを以て命令體の文とせり。卽、次の如きものを以て命令體の文とするなり。

機密の事を漏洩すべからず。

園山に遊ばゞ山陽先生の墓をとふべし。

これらは義務を對手に示し、事實上命令禁止をあらはすことありといへども、しかもこれ義務を示せるのみにして、命令體の文にはあらざるなり。或は又說明體の文を以て、

■右の問題の解答を問ふ。

などの如く事實上疑問を提出することを得べし。然れどもこれらはすべて實用上の論にして文體上の論にあらず。もと句の體の區別は文法上、句の體形及び意義の關係に存する特質によりてなせるものにして實際上如何なる意義に用ゐらるゝかは問ふ所にあらず。かくの如きは修辭作文上の注意として或は可ならむ。文法上は何等の價値もなき愚論なり。

四六四　疑問體の單文は之を以て反動的に叙述を強むる意をあらはすに用ゐることあり。又この單文を以て命令、感動の用をなすことを得べし。

疑問體の單文を以て反動をなせるものの例。

あにあはれむべきことならずや。

これ卽、疑問體を以て、說明をなしたるものにして、反動的に說明を有力ならしむるものにて、所謂反語なり。從來は反語をとくに語論のうちに於いてし、若くは句體の種類とす。皆謬れるものにして、これたゞ句の用法上の一現象にすぎざるなり。又次の如き例あり。

汝はまだこの事を了へぬか。

これは疑問體を以て催告をなし實際に命令をなせるなり。或は又次の如き例もあり。

あつぱれの豪傑を死なせたるか。

これまた從來の說にては感動體といふなるべし。されど、これまた體としては疑問體にして、眞に疑ふにあらず、自問自答の體にて感動を寫したるなり。

四六五　命令體の單文は之を以て疑問を提出することをうべし。

その例。

上の方程式を說け。

これ疑問を提出せるものなれど、命令體の文たるを失はず。すべて文體の區別はその思想發表の方法に關する性質上の區別にして單に意義上の問題にあらずとしるべし。

四六六　すべて述體の單文を以て條件をあらはすことあり。この時は形の上にては下の文と關係なけれど、意義の上にては下の文と相待つて合文の用をなす。

述體の各種即ち說明體、疑問體、命令體のいづれも本文にいへる如き用をなす。その例

一、今こそかくあれ、昔は我も世に用ゐられしものなり。

二、果して君の言の如くならんか、これ一大事なり。

三、何はともあれ、先づこの事を成さざるべからず。

一は說明體、二は疑問體、三は命令體にしていづれも下の文に對して條件の關係に立てり。これらの事は著者がはじめて之を說けるより以前に文法書に之を說きしを見ず。

單文は以上本章にいへる如き用をなすこと少からず。しかれども、かく用ゐらるゝことは一々、文法上にて說くを要せず。卽、文法上の問題にあらず。さりとてかばかりの事は初步の文法書としては加へおく方かへりて利益あるべし。卽ちこの章を以て單文の種々の用法あるをさとらしめ、以て文法上の知識を實地に活用しうる端緒を啓くものとす。

第四十七章　複文概說

四六七　二以上の句が言語の形の上の拘束を有して一體となれる文を複文といふ。

二以上の句が、意義上の關係のみを有し、言語の形の上にては互に無關係にしてしかも合して一の思想をあらはすことあるは前項に述べし所なり。然れどもさるものは文法上にては各自獨立の單文にしてここにいふ複文にあらず。この故に複文といふにはその句どもが、言語の形の上に一體となるべき拘束をうけて成立せるものたるべきなりとす。

四六八　複文は之を句の複合の方式によつて區別して、重文、合文、有屬文の三とす。

複合の方式は二九〇項に說きたるところなるが、これが句の複合にもあらはれてこゝに複文の三別を生ず。卽ち並列の組織になれる複文をば重文といひ、合同の組織になれる複文をば合文といひ、主從の組織になれる複文をば有屬文といふ。重文とは句を重ねてつくれる文、合文とは句を合せてつくれる文、有屬文とは附屬性の句を有する文の義なり。

四六九　前後對等の資格を有する二以上の句を重ねて一としたる文を重文といふ。この際上の句を上句、下の句を下句といふ。而して上句の述格を連用形になして(口語にては「し」助詞を加へて)重ぬ。

重文は上にいへる如く並列の組織になれるものにして、前後の二句意義の上にては個々別々のものなるが形の上にて相連りて一の文をなすをいふ。その一文をなすに至る言語上の拘束は上の句の述格を連用形にして下の句に重ぬる點に存し、口語にては又述格に接續助詞「し」を添へてもあらず。その例

月清く、風涼し。
人は歩み、犬は走る。
花咲き、鳥鳴く。
花も咲くし、鳥も鳴く。

これらいづれも、同時に又は引續きて、起り又は思惟せらるゝ事項を重ねいへるに止まり、その連絡は唯形式の上に有するのみなり。次の合文を化學上の化合物に比すとせば、これは所謂混合物に似たるものなり。

四七〇　前後の二句が、對等の資格を以て相合同して一の新しき思想をあらはすに至れる文を合文といふ。この際上の句を伴句といひ、下の句を主句といひ、伴句の述格に接續助詞「し」を除く外を附して二者を結合せしむ。

合文は上にいへる如く合同の組織になれるものにして前後の二句は互に對等の資格を以て相對すれど、相抱合して、元の二者のいづれにもあらざる一の新しき思想を表明するに至れるものにして化學上にいふ化合物の如き性質を有す。その言語上の拘束は上の句の述格に接續助詞「ば」「と」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」等を附して上下を結合するにあり。その例

月清くば庭に出で眺めむ。
月清けれど風涼しからず。
花咲かば上野に赴かむ。
花は咲くとも鳥は鳴かざらむ。
花は咲くに鳥は未だ鳴かず。

複文の三種の別、特に合文を他と區別して一類と立つることは著者の創見に屬す。從來は余がいふ合文と有屬文とを混一して複文と名づけ之と重文との二種を認めたるに止まり、この合文の上なる句をは副詞句と稱せり。然れどもこの上なる句は、

花咲けば　鳥なく。
花は咲けども　鳥は鳴かず。
花は咲くとも　鳥は鳴かざらむ。
花は咲くが　鳥は鳴かず。
花は咲くに　鳥は鳴かず。
花は咲くを　鳥は鳴かず。

の如く、下なる句の意義を修飾限定せるものにあらず。但し下なる句は思想の主たることは勿論なり。かくの如きものは、上の句と下の句とが相合して一の大なる思想をあらはせるものにしていはゞ相持ちのものなり。而してこれらは皆論理上の約結命題の如きものを構成するものにして上の句が下の句の條件たるが如き勢はあれど、修飾する意なきは明なり。この故に之を副詞句と稱するはあたらざるなり。

かくの如くなるにも拘らず、之を副詞句と稱する所以のものは其源英文典にあり。英文典にては文を單文

(Simple sentence)、重文 (Compound sentence)、複文 (Complex sentence) の三に區別せり。而して吾人の所謂合文はこの Compound sentence 中に入るべき筈のものなるに英文典にては皆これを Complex sentence 中に說けり。世の文典家の三分說はみなこれを墨守せるものなり。

しかるに之を獨逸文典にかへりみるに、該文典は文の結合をば、

Satzverbindung　對結文章

Satzgefüge　附結文章

の二として、吾人の重文及び合文をば對結文章とし、吾人の所謂有屬文をば附結文章として明に區別せり。吾人の合文と重文とを合一して一類となすことをさておきて論ずるときは獨逸文典の方遙に合理的にしてしかも明瞭なり。而、獨逸文法にては吾人の重文と合文とは共に接續詞にて結合せられそのさまも相似たれば、之を一括して說明する方寧ろ利ありといふべし。しかれども、吾が文語にありては重文は用言をば連用形になして述語となし、合文は接續助詞を添へてつづくるものなれば、之を區別する方意義の上よりいふも形の上よりいふも共に妥當なりとす。この故にこれをたて、一類となすなり。

附屬句と有屬文

四七一　句が文中にありて語と同じくある位格の地位に立つものを附屬句といひ、附屬句を有する文を有屬文といふ。

有屬文は必ずしも二の句より成るものにあらざれど、その二の句より成れる場合に、その成分たる二の句の關係よりいへば、主從複合になれること明にして一の句はその主體となり、他の句は之に附屬する位地に置かれたるものなり。その附屬句の事は下章に詳に說くべけれど、今略說せむに、それらは文中にありて或は主格となり、述格となり、賓格となり、補格となり、連體格となり、修飾格となる。その例

複雜なる複文

此の地の商業の興れる(主格)は工業に同じ。
この庭は石燈籠の配置がうまい。(述語)
あの人の美點とする處は操行の極めて正しき(賓格)なり。
この島人は禮儀正しき(賓格)が如く思はる。
余ははじめてその言の信なる(補格)を知れり。
夷狄の君ある(主格)は諸夏のなき(補格)にしかず。
彼は紅塵空を蔽ふ(連體格)活劇場裡に入り來れり。
唐辛子は夥よく(修飾格)生ひ立てり。

四七二　文の組織の複雜なるものに至りては合文有屬文を重文の上句又は下句の形になし、重文有屬文を合文の伴句又は主句の如くになし、重文合文を附屬句の如く用ゐることあり。或は又上下異種の文を以て重文の形を構成するあり。

合文を重ねて重文の形にしたるもの。
形病めば心も病み、形つくれば心も盡く。
有屬文を重ねて重文の形にしたるもの。
慾深き人はその心いつも貧しく、慾なき人はその心常にとめり。
重文を合文の伴句の形にしたるもの。

内外の智人にすぐれ和漢の才身に備りしかば、此處彼處に寄り合ひ歌をよみ、詩を作りて互になぐりを惜みけり。

重文を合文の主句の形にしたるもの。

出でて川邊に佇めば、月清く風涼し。

有屬文を合文の伴句の形にしたるもの。

炊煙の空高く上るも見ゆれば、人家は近かるべし。

有屬文を合文の主句の形にしたるもの。

夜は更けたれば、車夫の客待ちするだに見えず。

重文を附屬句の如く用ゐたるもの。

たとへば德高く心清き人の如し。

五常の道廢れて風俗日に下り行くこそ嘆かはしけれ。

合文を附屬句の如く用ゐたるもの。

牛は力強けれど歩むこと遲し。

かくの如くその複合は種々にあらはれて一々之を說くこと難く、また一々之を說く必要を認めず。要は上の三類を模範形式としてそれが、種々の狀態にて結合せらるといへば、足れり。世にはこれら複雜なる組織を混合文などいふ名目にてよべるあり。されど、模範形式にこそ研究上名目は必要なれ、さもなきものにことごとしく名目を設くること不必要なりといふべし。されば次章以下上の三類につきて模範形式を說くに止む。

第四十八章　重文

四七三　重文は二以上の句を重ねて組織し、その上句の述語は文語にては必ず連用形をとり、口語にては或は連用形をとり、或は接續助詞「し」を加ふるを通則とす。

この項は重文構成の通則をいへり。その二の句にてなれるものは前章に例をあげたるを以て、三以上の句にてなれる例を次に少しくあぐ。

大直は屈せる如く大巧は拙なる如く、大辯は訥なるが如し。

雨ふりいで風加はり神鳴りはためく。

商は交易し工は製造し農は耕種す。

志堅く望高く才亦之に伴ふ。

すべてこれらは唯重ぬるものなるを以て三句以上幾何にても必要に應じて重ねうべし。

上句の述格の形の普通の用言の例は前章に示したれば、今再び揭げず。次下特に注意を要すべきものにつきて述ぶべし。

四七四　形容存在詞動作存在詞を述語とせるものを上句とするは時その「あり」を除きたる語の連用形になほして重ぬるなり。

それらの例。

この間の眺め東京附近と更にかはるところなく、別に目を惹くものなからむ。

圖らざるに牛は死し、圖らざるに主は存せり。

富士山高く懸り、浮島が原廣く横れり。

「なり」の上句の述格なるとき

動作存在詞形容存在詞を述語とせるものを重ぬる時は必ず本文の如くせざるべからず。されど、この例の如きものは、皆本文の如き手續によりて生じたるものとはいふべからず。卽、尋常の動詞形容詞を上句の述語とし動作存在詞形容存在詞を下の述語となせるものなしとは限らざればなり。但この例の如きものは殆ど皆本文に說ける場合といひて可なり。

四七五　說明存在詞「なり」の述格に立てる句を上句とするにはその連用形を以て重ぬるものの外その助詞「に」と「あり」とを分ち、「して」を「あり」の代用とし、又その「し」を省き「にて」をその代用とし、又その「に」のみにて述格をなし、或は全くこれらを省き資格のみにて上句の述格をなすことあり。

「なり」の連用形にて上句の述格をなせる例。

舜も人なり我も人なり。

夜は靜かなり月は冴えたり。

「なり」の連用形の代りに「にして」「にて」を用ゐることは既に第二十八章の三〇三項、三〇五項に說きたり。それらの上句をなせるものの例

天地ただ平和にして、四顧たゞ寂寥たり。

口語の「で」にての上句の述格

金は黃色にして、銀は白色なり。

頭は人にて、身は魚なり。

春の夜は曇がちにて、朧月おぼし。

〃「に」のみにて上句の述格をなせるものの例。

桃紅に、柳綠に、春の風ゆるやかに吹く。

風さわやかに、氣清し。

その資格のみにて上句の述格をなせるものの例。

孔子名は丘（にして）、孔子はその尊稱なり。

天氣また清朗（にして）、風おもむろに四方の眺望はじめの如くなりぬ。

「たり」の上句の述格

四七六　口語にありては、前項の如き場合には「で」を加へて上句の述格を構成す。又その「で」に「して」を加ふることもあり。

その例。

あれは櫻で、これは桃だ。

わたしが見ただけで、誰も見ない。

それはほかのことでして、これだけがおもなことです。

御目にかけるのはこれだけでして、あとはもつてまゐりませぬ。

四七七　說明存在詞「たり」の述格に立てる句を上句とするにはその連用形を

以て重ぬるものの外、助詞「と」と「あり」とを分ち、「あり」の代に「して」を用ゐてその述格とす。

「たり」の連用形にて上句の述格をなせる例。

君は君たり、臣は臣たり。

「として」にて上句の述格をなせる例。

天地寂莫として、四隣に聲なし。

水淼茫として、舟搖々たり。

複語尾にての上句の述格

四七八　複語尾にしてその連用形を以て重文の上句の述格を形づくり得るものは同格連用をなしうる「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「ず」「つ」「べく」「まじく」なり。

この項はかの同格連用（第三十八章三七二項）を參照して研究するを要す。これらの用例次の如し。

野は細流に截られ、街は水に夾まる。

賴朝は二弟をして平氏を攻めしめ、己は鎌倉に止れり。

忽ち螺をふき立てさせ、主從僅に六騎にて出陣せり。

潮は手に滿ちて泡さへも見えず、音さへも聞えず。

凡そかくべき事柄ありて、而して後文章生ず。

その量欽すべく、その德仰ぐべし。

この事は君も承諾すまじく、余も亦君に勸めじ。

連用形を有せぬ複語尾の場合

「ざり」「べかり」の場合

四七九　連用形を有せざる複語尾「む」「き」「けむ」「らむ」等又は連用形ありても同格連用に用ゐざる「けり」「たり」等を述格に有する句を上句とする時はそれらの複語尾を削り、用言の連用形を以て述格の形とす。

それらの例。

運ある者は運の結果をうけ、働ある者は働の報を得む。

紀信は高祖の命に代り、義光は親王の爲に死にき。

雨ふり風ふきぬ。

智識は名目の爭に留まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。

折りしも北風雨を吹き、寒さは肌をつんざきけり。

四八〇　複語尾「ざり」「べかり」の類は上句となる時に「ず」「べく」にて述格をなし、又「ず」の下に「して」を加ふることあり。

かくなる理由は、「ざり」「べかり」は「ず」「べく」と「あり」との結合體なれば、この際には還元して二者に分ちその「あり」を省き「ず」「べく」にて上句の述格をなすなり。その例

雨もふらず、風もふかざらむ。

花も咲くべく、鳥も鳴くべからむ。

この「ず」に「して」を加ふることあり。この「して」は又「あり」の代用なるなり。

山も海も皆暮れ夜更けて西東も見えずして、天氣の事揖取の心にまかせつ。

又この「ず」の代に「で」を用ゐることあり。

空は霧れで、雪さへ降り出づ。

「で」につきては第三十八章三七五項を參照すべし。

上句の連格に「て」を加ふること

四八一　重文に於いては上句の連格に複語尾「て」を加へて結合を强むることあり。

その例。

月さえて、雁高く飛ぶ。

花もちりて、梢は青葉になりぬ。

重文に於ける接續語

かくの如き「て」は多數の上句中事實上特に密接なる關係を有するものを結合する用をなすことあり。

春過ぎて夏來り、秋往きて冬到る。

いらか破れては霧不斷の香を焚き、とぼそ落ちては月常住の燈を掲ぐ。

或は又上句二個を一として、次に重ぬる用をなすことあり。

月落ち、烏啼いて、霜天に滿つ。

美酒あり、嘉肴ありて、この月なきを如何にせむ。

四八二　重文にありては上句と下句との意義上の連絡を圓滑にし、或は緊密にせむが爲にその間に接續語を置くことあり。この接續語は文法上下句に屬するものとす。

その例。

志堅く、且つ望大なり。

酒あり、又肴あり。

四八三　重文にありては上句は必ず述體なるべけれど、下句は喚體なることあり。

その例。

秋はぎをしがらみふせてなくしかの目にはみえずて、音のさやけさ。

四八四　重文は全體を以て說明するを普通とすれど、又重文を以て疑問體、命令體をなすことあり。

重文全體の文體の差異は下句の體によりて定まるものなるが、その說明瞭なるは上來あげし多くの例に著しければ略す。その疑問體なるものの例。

酒あり、肴ありや。

果して命の如く甲は行き、乙は止まりしか。

その命令體なるものの例。

汚れたるはすて、清きのみをとれ。

汝等のうち一人は止まり、餘のものは皆來よ。

四八五　重文は文全體の修飾格として感動の修飾格を伴ふことあり。

重文の句の配列

その例。

あはれ、我が友は失せ、我が運命はきはまりぬ。

あはれ、風烈しく吹き、雪さへ加はりぬ。

四八六　重文は上句は上に、下句は下にありて、位置を轉倒せしむることなきを通規とす。但し「て」にて述格をなす上句は往々轉置せらるることあり。

その「て」にて述格をなせる上句の下句の下に置かれたる例。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ。我が身一つはもとの身にして。

ありときく音羽の山のほととぎす何かくるらむ。なく聲はして。

第四十九章　合　文

合文の組織

四八七　合文は通例二の句にて組織し、伴句の述格には接續助詞「し」を除く外のを添へて結合したるものなり。

喚體の伴句

四八八　喚體の句を伴句として合文としたるあり。この時はその句の末を「ものを」「ものの」といふ形にして主句につづくるなり。

この「ものの」「ものを」の「もの」は上なる句を體言化せしむる力をあらはしたるものにして「の」「を」にて下につづくる用をなすなり。その例。

なつかしくやはらかなるものの、いとめづらかに面白し。

愁どもしきりなるものを、など遲くは參りつるぞ。

たちぬはぬ衣きし人もなきものを、など山姫の布さらすらむ。

これら、「もの」の上なる句が、述體なる場合にても「もの」を加ふるによりて喚體に化したるものなり。從來の研究によれば、かくの如きものは大抵は放棄して顧みざりしものなれど、かく解してはじめてその構成も明に了解し得らるべきなり。

伴句と主句との狀態

四八九　合文の伴句の述體なるものはその接續助詞に應じて假設又は實在の條件を示し、又は共存の事實を示すものなるが、その主句は或は喚體を以てし、或は說明體を以てし、又は疑問體を以てし、或は命令體を以てす。

伴句の意義はその接續助詞の各個の力に待つもの多きものにして、それの助詞の性質は既に述べたれば、今說かず。次には主句の如何を例示すべし。

主句が喚體句なるものの例。

いそがずばぬれざらましを、旅人のあとよりはるる野路の村雨。

郭公一こゑとこそ思ひしに、まち得てかはる我が心かな。

早き瀨にみるめおひせば、我袖の涙の川にうゑましものを。

主句が說明體なるものの例。

世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心は長閑からまし。

昔頼光といふ人ありけるが、誠に人にすぐれたる豪の者なりけり。

日くれかかるに、やどるべき家もなし。

春は立ちしかども、風なほ寒し。

主句が疑問體なるものの例。

もし天氣よくば、君は旅行したまふか。

鶯の谷より出つる聲なくば、春くる事を誰かしらまし。

氣候かく順調なれば、農家の愁眉や開かれむ。

主句が命令體なるものの例。

夜啼すと、ただもりたてよ。

若し汝之を欲せば、欲するままにせよ。

つゆも物空に翔らば、ふと射殺したまへ。

こは面白き事なれども、あまりに耽るな。

大和撫子さまざまにおのがむきむき咲きぬとも、おほしたててし父母の庭の訓にたがふなよ。

この主句と伴句との關係に於いて、未然形をうくる「ば」「と」「とも」に對しては、主句は未來の語法を用ゐ、已然形をうくる「ば」「と」「ども」に接しては過去の語法を用ゐざるべからずといふ如き說をなせるものあり。これは一往理ある如く見ゆれど、實は不通の說なり。今「ば」のみにつきていはむに、その未然形を受けたるものに對して次の如く種々にいふことを得む。

明日日曜日ならば、遠足に行かむ。

明日日曜日ならば、余がいひし通りなり。

明日日曜日ならば、昨日は金曜日なりしなり。

かくいふをうるを見よ。又已然形を受けたるものに對しても、

昨日日曜日なれば、今日は月曜日なり。

昨日日曜日なれば、明日は火曜日なり。

それは面白き事なれば、小生も明日より文を學ばむ。

かくいひて「き」「けり」等を加ふることなきのみならず「む」をさへ用ゐるにあらずや。この他「とも」「ども」に對して同樣の事をあげて論じうべし。要するにこれらは修辭上の問題にして文法上の問題にあらざるなり。

四九〇　合文の複雜なるものに至りては一の主句に對して二以上の伴句あることあり、合文を以て主句又は伴句の地位に立たしめたるあり、又主句の地位にも伴句の地位にも合文を用ゐたるものあり。

一の主句に對して二以上の伴句あるものの例。

雨は降りたれど、春の日數も殘り少になりたれば、花見に出で行きぬ。

春は來たれども、櫻の花の未ださかねば、人の心ものどけからず。

合文を以て伴句としたるものの例。

讀まむとすれど、讀みかねしかば、上聞に達しぬ。

伴句の末に加ふる係助詞

伴句中の係助詞

裘は火にくべて焼きたりしかばめらめらと燼けにしかば、かくやひめあひたまはず。

合文を以て主句としたるものの例。

吾が行ひ道理にかなはば、世こぞりて毀るとも懼るべからず。

相戦はむとすとも、かの國の人きなば猛き心つかふ人よもあらじ。

伴句の地位にも主句の地位にも合文を用ゐたる例。

のちに男ありけれど、子あるなかなりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり。

停車場に行きけるに、既に発車したれど、そのままかへるべきにあらねば暫くまてり。

四九一　合文にありては伴句の述格に附属せる「ば」の下に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」等を加ふることあり。この時には主句の述格は之に應じて連體形又は已然形を以て終止す。

それらの例。

人をおもふ心木の葉にあらばこそ風のまにまにちりもみだれめ。

天の川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ。

龍の首の玉をえ取らざりしかばなむ殿へも参らざりし。

いかならむ岩ほの中にすまばかはよのうき事のきこえこざらむ。

四九二　合文の伴句のうちに係助詞あるときは、その結は接續助詞に吸收せられて、主句に勢力を及すことなし。

伴句の述格を導く修飾格

句中にある係助詞の勢力はその句の述格に勢力を及ぼすに止まり、その外に勢力を及ぼすことなきものなるが、ここにては述格は接續助詞によりて下につづくるに至りたれば、その係助詞の勢力はこの接續助詞に吸收せられて、別に終止の曲調を起すことなきなり。その例

あひみてはなぐさむやとぞおもひしに、なぐりしもこそ戀しかりけれ。

いでにこそ人の心もうつろふを、色にみせたる山櫻かな。

これらを「詞の玉緒」には「ぞ」「こそ」に對して「に」「を」を以て結ぶといへれど、そは當らず。「に」「を」は結氷にあらずして接續なるをや。かくの如きは結尾と接續との區別もなき論なり。なほ他の例どもをあげむ。

はりまがたうらみてのみぞすぎしかど、こよひときりぬあふの松原。

命をばあふにかふとかききしかど、われやためしにあはぬ死にせむ。

信濃なるそのはらにこそあらねども、わがははきぎと今はたのまむ。

都人さこそまつとも、郭公おなじみ山の友な忘れそ。

是こそ善惡の分るる所なれば、心を用ゐるべし。

珍らしき春もあすとぞきこゆれば、くれなん年をなにかをしまん。

四九三　合文の伴句の述語に對して用ゐらるる一定の修飾格あり。そは「若し」「蓋し」「たとひ」「よしや」などいふ語にして伴句の述格を修飾し、接續方法に一定の約束を有す。

主句の修飾格

ここにいへる修飾格はいづれも陳述の修飾格にして、「若し」「蓋し」等は伴句は必ず、順續の假設條件なるを要し、「たとひ」「よしや」等は伴句は必ず、戻續の假設條件なるを要す。その例

もし假寢せば、夢も亦絲ならむ。
蓋し天氣清朗ならば、眺望も亦可ならむ。
たとひうれへ侍りとも、何のかひか侍らむ。
よしや敵人きたりとも、われかくあれば、心強く思召せ。

合文に於ける呼格

四九四　合文の主句を修飾する修飾格あり。これは必ず主句の上、伴句の下に介在し、しかも主句に附屬するものとす。

その例。

明日天氣ならば、恐らくは野田君來らむ。
雨はいたく降れど、しかも友は訪ひ來れり。

この際の修飾格は下の句と上の句との間にありて上の句の述語の上にあること決してなし。この法則を亂るものは文法上作文上破格のそしりをうくるのみならず、文意を正しく人に傳ふること能はざるべきなり。

四九五　合文の全體の副成分として呼格の語を伴ふことあり。この呼格の位置は單文のにおなじ。

その例。

やよ、しぐれ。物おもふ袖のなかりせば、紅葉の後に何をそめまし。

合文の句の配列

花の色は霞にこめてみせずとも、香をだにぬすめ。春の山風。

四九六　合文にては伴句は上に、主句は下にあるを通則とす。時としてはその位置を顚倒せしむることあり。

その顚倒せしめたる例。

句ひつゝ散りにし花ぞ思ゆる、夏は綠の葉のみしげれば。（後撰集）
君しるらめや。人しつげずば。（古今集）
君がよは限りもあらじ、長濱の眞砂の數はよみ盡すとも。（同上）

第五十章　有屬文

有屬文

四九七　有屬文とはその中に獨立の資格を奪はれたる句又は文を有する複文をいふ。

有屬文とは附屬性の句又は文を有する文にして、これと上の重文合文と異なる點は彼は二の句が對等に互に結合せられたるに、これは句又は文が、他の文の素材たる語の位格に立たしめられたるもの、即ち從屬組織によれる複文なり。

附屬句

四九八　句が獨立を失ひ他の文中に於ける語の代用をなしそれらの位格を充す爲に從屬者として用ゐらるるものを附屬句といふ。

附屬句の種類

準體句

四九九　附屬句はその用ゐらるる資格よりいへば、主格に用ゐらるるもの、述格に用ゐらるるもの、賓格に用ゐらるるもの、補格に用ゐらるるもの、連體格に用ゐらるるもの、修飾格に用ゐらるるもの等に分つをうべけれど、その形よりいへば、體言に準ぜらるるもの、述格に用ゐらるるもの、連體格に用ゐらるるもの、修飾格に用ゐらるるものの四者に攝するを得。

附屬句の各位格に用ゐられたるものの例は、既に四七一項にあげたれば、ここに掲げず。さてそれらのうち、主格、賓格、補格に用ゐらるるものは、いづれも體言に準ぜられたるものの用法にすぎざれば之を一として研究するを便とす。この故に附屬句は上の四類として研究を施すべし。

五〇〇　體言に準ぜらるる附屬句は準體句といふ。これはその述格は必ず連體形をとるものにして、文中にありては體言と同じ取扱を受けて、主格、賓格、補格に用ゐらるるなり。

この句はその述語の形が準體言たるのみならず、句全體が實際體言に準ぜらるるものなり。

主格に立てる例。

人の來りてのどかに物語して歸りぬるいとよし。

雁の空高く渡るも見ゆ。

昔より賢き人の富めるは稀なり。

君子の先祖にあつきは榮を求むる爲にあらず。

その賓格に立てる例。

恐れをののくさま雀の鷹の巢に近づけるが如し。

そはきく人のあしきなり。

その補格に立てるものの例。

吾はその時夜の更くるをも覺えざりき。

多くの人はおのが心の愚なるを知らず。

是は人の見るべきにもあらず。

その困難は盲人の杖を失へるにおなじ。

譽あらむより誹なかれ。

準體句といふ名稱は著者が始めて用ゐしものなり。從來はこれを名詞句といへり。されど、名詞といへば、何かの名稱なるべく聞えて實際とあはず。寧體言句といふ方まされり。されど、體言句といふ名目は語調落ち付かず。この故に著者はその意義と形との二方面よりしていづれよりするも都合よき準體句といふ名をとれり。これその用法よりいへば、體言と同じく、或は主格賓格補格となりうるものにして、その形よりいへば、準體言と同じく連體形よりなれり。（かくの如き形よりなれるものは英語などにはなし。）この故に準體句といふ名稱は意義、用法、形、及記憶の便利よりいふも最妥當なるものなりとす。

五〇一　述格に用ゐらるる附屬句は陳述句といふ。これは、上にそれに對する主格をうけて、陳述をなすものにして句の形には何等の變化なきものなり。

その例。

この猫は何の能もなし。

昨日は雹ふりたり。

あの人は交際がうまい。

この庭は石燈籠の配置が巧みだ。

ここにいふ陳述句を有する有屬文と、上にいひたる副主格を有する單文（四三三項）とは往々混同し易し。單文の副主格はそれなくともその主格と述格とにて意は通ぜるなり。例へば、

唐の物は（藥の外は）なくとも事かかず。

象は（躰）大なり。

彼は（兩眼）盲せり。

この人は（年）老いたり。

の如く括弧内の副主格はなくとも意通じ、加ふれば、その點一層明になるの差あるのみなり。この有屬文にありてはそれに準じて陳述句の主格を省くときは或は意を異にし、或は語をなさぬこと次の如し。

この猫は（　）なし。

昨日は（　）ふりたり。

（これは必ず雨雪を豫想するによりて「ふりたり」にて意通ずるなり。若し、雨雪をいふにあらぬときは省くこと能はざること原文と對照してさとるべし。）

あの人は（　）うまい。

この庭は（　）巧みだ。

卽ちこれらは下なる主格と述格とが一の句をなし、その句にて更に上なる主格に對して陳述せるなれば、副主格のある單文と形は殆ど同じくして意は異なるものとす。

五〇二　述格を連體形にして體言につづけて、それを限定するに用ゐらるる附屬句を連體句といふ。

その例。

東西の市は人の集まる所なり。

河原などには馬車の行き違ふ道だにもなし。

かの木の茂りたる所こそ神の鎭まります所なれ。

わが國人の公德に乏しきは識者の常に慨嘆する所なり。

君が植ゑおきし櫻の木かげもなつかし。

連體句も亦著者の始めて名づけしものなり。從來これを形容句又は形容詞句などいへれど、西洋文典直譯にすぎずして國語の實際に適せず。卽ち形容詞といへるものはかれの形容詞と異なるものを譯しおきながら句法上の名目のみにかくの如くするは甚當らず。故に著者は、連體語の役目を有して述語の連體形なる句をば連體句と稱せり。これも亦意義用法形及記憶に便なる點より見て最妥當なるものなりとす。

五〇三　準體句は又連體格に用ゐることあり。この時には助詞「の」「が」にて助けて下の體言を限定す。

修飾句

その例。

まさにこれ日蘭なるの時。

金は色の黄なるが故に貴きか。

山高きが故に人之を貴ぶにあらず。

この場合のごとき前の連體句とは混同し易し。卽ちいづれもその述格を連體形になして連體格をなすが故なり。されどこれは、その連體形にて一旦準體句となり、さて體言所屬の助詞「の」「が」にて助けたるものなれば、區別あること明なり。

五〇四　修飾格に用ゐらるる附屬句を修飾句といふ。この句は述格を連用形になして用ゐ、ままその下に格助詞「に」又は副助詞を附くることあり。

その例。

君は餘念なく文章を起草し居られたり。

聲たえず鳴けや鶯。

とはざりし人もとふべく、わが宿の花のさかりをすごさずもがな。

名汚れては武士の道立たず。

鵬翼雁の如くに我れは澄潭を下る。

この男が尻鼻血あゆばかり蹴たまへ。

秋風膚寒きまでになりぬ。

修飾句の名目も亦著者のはじめて名づけしものなり。從來はこれを副詞句と稱せり。しかれども、これは副詞の代表をなせるものにあらずして修飾語の位地に立てるものなればかく名づくるをよしとす。さてこれらはその述格は連用形なるものなるが、その連用形も所謂修飾連用をなすものにして、複語尾にては三七三項にいへる如く、「ず」「て」「たく」「べく」「まじく」に存するなり。

引用の語句

引用の語句の取扱

五〇五　原文の原形のまま他の文中に引用せらるるものあり。之を引用の語句といふ。引用の語句あるものも亦有屬文なり。

五〇六　引用の語句は文中にありては體言と同じ取扱を受く。隨つて主格、賓格、補格、連體格として用ゐらる。

その例。

「古池や蛙とびこむ水の音」は芭蕉の名句なり。

「花咲けり」は單文なり。

「君の御諚には如何でか異存を申すべき」なれど。

乞ふ「その寶の何なるか」を語れ。

彼意を決して「否余の書せるものなり」と答ふ。

あゝ世上何ぞ「男でござる」の人少きや。

これらはその代表せる語の位置についていへば、準體句と共に名詞句とも稱せらるべきものなり。されど、その意義は他に存せるものをそのまゝ引き來れるものにして、その述語の形は元のまゝにして之を特に連體形になほして體言に準ずるに及ばざるものなり。かくの如きものをば、準體句と區別するは當然の事なり。

多數の附屬句ある文

五〇七　有屬文は二以上多數の附屬句を有すること少からず。これらは一々枚擧すべきにあらねど、二三の例を次に示すべし。

風俗の惡しきに趣く樣水の下に傾くが如し。

汝の行くは他人の行くよりもよし。

美しき花の咲く香しき實のなる樹あり。

船人の島と見しは雲の海上に浮べるなりき。

士の世に處するは錐の囊中にあるが如し。

複雜なる有屬文

五〇八　有屬文の複雜なるものには附屬句の中に更に附屬句のあるあり。重文を以て附屬句とせるあり。その他種々ありて一々枚擧すべからず。

附屬句の中更に附屬句あるもの。

君が住む里の霞に隱さるるまで我は行く〳〵顧みたり。

富士の山を白扇の面に懸れるに譬ふるは丈山の詩に見ゆ。

身體虛弱なる人の過度に勉強するはよろしからず。

重文を以て附屬句とせるもの。

規模の雄大にして、建築の宏壯なる實に天下に冠たり。

わが國には山紫に、水明なる佳景多し。

花のさき、實のなる樹。

五〇九　附屬句及び引用の語句の位置はそれが代表する位格の位置におなじ。而それらのうち、主格、補格、修飾格に立てるものは、時として顚倒して述格の下におかるることあり。

主格、補格、修飾格たる附屬句引用の語句の位置顚倒せられたるものの例。

あけぬるか、川瀨の霧のたえたえにをち方人の袖のみゆるは。

いづくんぞ知らむ、この事あるを。

思ひきや、君なき宿をゆきてみんとは。

山風に櫻吹きまき亂れなむ、花の紛れに君とまるべく。（後撰集）（古今集）

第五十一章　語句の省略

五一〇　實用上の文には成規の成分を具せずして往々あるべきものを省略してあらはさざることあり。その最もよく省略せらるるは主格なり。

五一一　第一人稱の文、第二人稱の文にありては多くは主格の省略あり。又第三人稱の文にありてもその主格が一般の世人又は熟知せられたるものなるときは往々之を略す。

第一人稱の文の主格を略せる例。

（わが）南山の頂に立ちしはまさに午後七時半。
（我は）乞ふ。（我等は）これを歴史に見む。

述格の省略

第二人稱の文の主格を略せる例。
（汝等）人の惡をいふことなかれ。
（汝）みてこい。
あるじなしとて（汝）春を忘るな。
（汝等）余をして少しく語らしめよ。

補格の省略

第三人稱の文の主格を略せる例。
（我等は）之を以てただちにその起點とはいふべからざらむ。
（人々）出品に手を觸るべからず。
（世人）之を富士山といふ。

五一二　「を」「に」に伴はるゝ補格も亦、說く人ときく人との間にて互に熟知するものなるときは省くこと多し。

余は少しも（それを）知らざりき。
人は（我を）誹るとも、我は（人を）咎めず。
君は五郎を見しか。我昨日（五郎に）あひたり。

五一三　述格たる用言も亦往々省かるゝことあり。これは歌謠諺等に頗る多し。

福は內（に在れ）鬼は外（に出でよ）。
口は禍の門（なり）。
千里の道も足もとより（始まる）。

複文中の省略

五一四　複文中にありて數回繰り返して用ゐらるべき語は上下いづれかの句に一二を存し、他を省略することあり。

その重文に於ける例。
一重の櫻は散り、八重（の櫻）はうつろひぬ。
綿は巨勢のあふみ（かき）、手は紀の貫之かけり。　（源氏綿合）
あし引の山時鳥（の聲の聞えぬ）のみならず、大方鳥の聲もきこえず。（後拾遺集）

その合文に於ける例。
馬は必ず人に乘らるべきものにて候へば、いかに猛き（馬）も人に從はぬ事や候ふべき。
正成兵庫に着きければ、新田左中將（正成に）對面し給ふ。
（鸚鵡は）他所の物なれど、鸚鵡いとあはれなり。

その有屬文に於ける例。
げすの家に雪のふりたる、又（げすの家に）月のさし入りたるもいと口をし。
佐久間盛政柳が瀨にて中川清秀を討取りける時、秀吉長濱より一騎がけにて（柳が瀨に）來り、（佐久間盛

合文の主句の省略

政を）攻められたり。

五一五　合文が引用句となるときは往々その主句を省き去ることあり。

「悲しといはずして讀者が内に自ら悲を起せば（　）」なり。

「世の中にあらましかば（　）」と思ふ人なきが多くもなりにけるかな。

「いつしかいでさせ給はば（　）」などきこえさするに。

「の」の省略の上の

五一六　すべて「の」といふ格助詞の上には語句の省かるること多し。

東京へ（行くべき）の道。

友より（贈られたる）の贈物。

明日から（行ふべき）の事。

支那と（共になせる）の戰。

これらは「の」にて連體格として導かるべき連語又は句にして、その格助詞「へ」と「より」「から」より下なる用言を略して「の」を以て之に代用するを通例とす。かくの如くするを得るはその格助詞と「の」との連續體が、通常の助詞の連續體にあらずして、吾人をして必ず然るべき語の省略を連想せしむる力あるが故なり。

五一七　すべて「と」といふ格助詞の上又は下には語句の省かるゝこと多し。

東京へ（行かむ）と志しぬ。

山雀目白など聲高く鳴きて奥山より野邊へ（行かむ）と出づ。

無用の費用を有用の爲に（供せむ）と貯蓄するなり。

「と」の上下に於ける省略

主のためにかばかりの怒りを忍びかぬる汝（なり）とは思はざりき。

機關砲と（いふもの）は如何なる砲なるかを知れりや。

さらば（これにて御暇乞とせむ）と（いひ）て立ち別れゆく。

いざ（行かむ）と（いひ）ていでたつ。

この後の三例にある「とは」「とて」といへる形は普通の文章に盛に用ゐらるゝものなれば特に注意を要す。

五一八　複語尾「て」は格助詞「に」「と」及び形容詞並にその性を有する複語尾「ず」「べし」「まじ」等の連用形、副詞「かく」「と」「さ」等より直ちにうけて中間にあるべき用言を省くことあり。

この項に說けるは「にて」「とて」「よくて」（形容詞の例）「ずて」「べくて」「まじくて」の如き形をさせり。「にて」につきては三〇五項に說き、「とて」は前項に例をあげたり。形容詞の連用形を受けたる「て」の例は次の如し。

壁代は白く（　）てあたらし。（宇都保藏開下）

猫は上の限りくろく（　）てことは皆白からむ。（枕　二）

御ぐし御裳に少し足らぬほどにてやうじかけたるごとく（　）て白き御衣にひまなくゆりかけられたり。（宇都保藏開上）

「ず」を「て」にて受けたる例は二七五項にあげたり。その「べくて」「まじくて」の例は次の如し。

いたづら人になりぬべく（　）てなむ。（宇都保、俊蔭）

おなじくは御らんじ所もまさりぬべく（　）ていとわざと集めまゐらせたまへり。（源、繪合）

御子達なむなほあくかぎり人にてむ、かるまじく（　）て世をのどかにすぐしたまはむにうしろめたかるまじき心ばせつきほしきわざなりける。（源、若菜、下）

「かくて」「さて」「とて」などの例

かく（　）ても經ぬる世にこそありけれ。（古、戀、五）

かく（　）てはえすぐさじ。（源蓬雲）

さ（　）てこそとらしめたきはめ。（竹取）

久しとはおぼつかなしや、から衣うちきてなれんさ（　）ておくらせよ。（蜻蛉日記）

と（　）てやかく（　）てやとよろづによからんあらましごとを思ひつづくるに。（源、東屋）

と（　）ても今はいふかひたきすくせなりければ。（源、帚木）

これらのうち「かくて」「さて」の如きは今は一語とまで認められれど、成立は實にこの省略に基づけり。なほこの類には、「などて」「いかで」などもあれど今略せり。

すべて語句の省略は從來あまり人の注意せざる處なれど、これを明瞭に意識するときは作文の際にも讀書の際にも明らかに思想を發表し、又は認識し得べきものなりとす

日本文法講義　終

大正十一年二月二十日印刷
大正十一年二月二十五日發行

定價金四圓五拾錢

不許複製
日本文法講義

著者　山田孝雄
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本石町二丁目拾五番地
印刷者　吉田松次　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍

發行所　關西專賣　東京市日本橋區本石町二丁目　振替口座東京二八〇番　東京寶文館
大阪市西區阿波堀通四丁目　振替口座大阪四三番　株式會社　大阪寶文館

——日本文法論——

布裝全一冊　定價金拾圓　送料金貳拾四錢

——奈良朝文法史——

布裝全一冊　定價金參圓六拾錢　送料金拾八錢

——平安朝文法史——

布裝全一冊　定價金四圓　送料金拾八錢

以上三種均しく山田孝雄先生の著作に係り好評嘖々國語國文界を益すること多大なり。敢て御採用あらんことを乞ふ。

東京市日本橋區本石町
大阪市東區淡路町

寶文館謹識

東京寶文館發行書目

山田孝雄　文學士　高木武校訂

校定　平家物語

布裝全一冊　定價金貳圓五拾錢　送料金拾八錢

平家物語は一面通俗體歷史たる外他面文學上の著作及び語り物として古來もて囃されたる書なり。其文優雅にして而も歛健、莊重にして而も豪宕、句々金玉の響あり。凡そ歷史文學に從ふ者皆讀まざるなし。唯現今流布の諸本は何れも、「一方檢校以吟味令開板之者也」の奥書ある略本にして、記事の脈絡を失ひ、しかも誤脫杜撰少からざるは遺憾なり。校訂者は我が文壇の爲に是等の俗本を驅逐し、眞正の本を呈供せんと欲して爰に本書を公刊せられたり。本書の底本は一方流平曲中興の祖と目せらるゝ沙門覺一の奥書ある所謂覺一本の別本にして、この外東京美術學校所藏の古活字本その他の善本を參考して嚴密に校訂し讀者をして眞正平家物語の如何なるものなるかを知らしめたり。讀者これに因りて安んじて平家物語の研究に從ふを得べく其の學界を益するの多大なる知るべからず。尙卷末には事實としての索引及文學としての索引を添へて披讀に便せり。敢て奬む。

東京寶文館發行書目

◀賜天覽台覽▶

蘆洲池田四郎次郎著

故事熟語大辭典

漢學界の泰斗池田四郎次郎先生、苦心數年晝夜來客を謝して、專心編纂せられたるは本書なり。世に此の類書數種ありと雖、未だ本書の如き完全せるものを見ず。眞に類書中の白眉なり。

△大正昭代の名著
萬古不易の寶典は是▽

◎布裝背革全一冊◎定價上製拾壹圓五拾錢並製拾圓◎送料貳拾錢

本書の内容

▲語　數＝三萬五千餘條既刊辭典より約一萬條多し
▲種　類＝支那文學關係の各方面に涉り五十餘種類
▲解　說＝簡明正確なる解說は他書に其の比を見ず
▲出　典＝原文のまゝ揭げ且書名編名章名を明記す
▲挿　畫＝多數正確なる插畫を加へ說述を裨補せり
▲索　引＝至便なる斬新の索引三種は檢索に便なり

東京寶文館發行書目

文學博士朝永三十郎著

近世に於ける「我」の自覺史

布裝全一冊
定價金貳圓貳拾錢
送料金拾貳錢

歐洲近世人の自覺が敎權と國家の專制に對する個人の覺醒とに始まり種々の變遷を經て現代新カント派に依つて純化せられたる現代理想主義の哲學と成りし迄の徑路を叙說せる者にして、混沌たる我國の思想界に裨ふ所を知らしめたる近來の快著なり。

獨逸思想と其背景

布裝全一冊
定價金壹圓
送料金六錢

本書は前著の姉妹篇にして、獨逸哲學を一貫せる中心特徵を提へ、之を標準として叙說したる中世より現代に至るまでの獨逸思想の概觀史なり。

增訂 哲學辭典

布裝全一冊
定價金三圓八拾錢
送料金拾八錢

從來我國に於ける哲學の辭典は或は原譯兩者を對照して譯語を示すに止るか或は主として教育に關する學語若くは題目を說明するに止まりしが、本書一たび出でゝ哲學全豹に亙りて廣く學語を解說して以來、好評歡迎湧くが如く今や廣き意味に於ける哲學研究者に取りて机邊必備　名著と成れり。請ふ御採用を賜へ。

東京寶文館發行書目

倫理學演義

東京高等師範學校教授
文學博士
吉田靜致著

上製全一冊
定價金六圓五拾錢
送料金拾八錢

該博の知識と最新にして卓越せる見識とを以て、倫理學の亘細を詳叙せられたる本書は、既刊の倫理書中一頭地を抜き、紙數壹千參百餘頁悉く金玉の文字に充つ斯學の研究に志す士及文檢受驗者諸君の是非一讀を要する好著たり。好評既に拾版を發行せり。

倫理學要義

上製全一冊
定價金四圓貳拾錢
送料金拾貳錢

本書は斯道新進の大家たる吉田博士が倫理學の要義を懇切に記述せられたるものにして、發賣以來好評嘖々、既に十數版を重ぬ。蓋し近來の名著たり。叢館は此の絶好の名著を紳士淑女の座右にすゝむるを光榮とす。幸に一本を求められんことを望む。

心理學審義

元東京帝國大學助教授
文學博士
福來友吉著

上製全一冊
定價金八圓
送料金拾八錢

本書は最近著者が斯學を更に一層深く考究して、大成せられたるものにして心理學に關する一切の事項を網羅せり。論理の卓越なる、譬喩の適切なる引例の豐富なる、而して新學説にて經緯せられたるの特色は、類書中比なし。幸に一閲の榮を賜へ。

心理學講義

上製全一冊
定價金五圓五拾錢
送料金拾六錢

本書は斯學のオーソリチーたる著者が、多年研究の結果公にせられたるものにして、叙述平易、論議明確、在來の書類と全く其の選を異にせり。初等、中等の教育に從事せらるゝの士及び文檢受驗者を始め、政治家・法律家・醫家必讀の名著たり。改版數次歡迎四湧。

東京寶文館發行書目

(最新刊) 倫理學概論

東京高等師範學校教授
荻原擴著

篤學の聞え高き荻原氏が忠實眞摯の態度で著されたる本書が一たび公にせらるゝや倫理學のあらゆる問題に觸れたると、著者の公平なる批判と、卷帙の手頃なるとに因りて好評嘖々たるに文檢受驗者に歡迎せらるゝのみならず、亦一般讀書子の好評を受く。

布裝全壹冊
定價金四圓五拾錢
送料金拾八錢

增訂最新 論理學要義

東京帝國大學講師 文學博士
今福忍著

著者は論理學專攻の大家として最も重きを斯界に置かるゝの士、今其の明晰なる眼識を以て多年研鑽の結果に成る本書を公にせらる。必ずや從來坊間に行はるゝ類書と其選を異にし傑出する所あるべきや論なし。されば斯學研究者は勿論教育家、政治家其他法曹界の人士に對し無二の良參考書たるべし。

布裝全一冊
定價金參圓八拾錢
送料金拾八錢

世界の衣食住

櫻井鷗村著

人生生存發達の最大問題たる衣食住の新研究

小樽高等商業學校教授 商學士 大西猪之介著

好評

伊太利亞の旅

君知るや
レモン咲く國
オレンジは
綠濃き葉に
てり映ゆる國

衣食住は人類生存發達の骨子、文明の淵源たり。之が材料の有無相通は世界關係の起端を成す。本書は宇內人類の由つて衣食し住居する凡百の材料を捉へ、神語傳說歷史文學より現在統計に說及し、讀者をして各自日常の生活は卽ち世界運行の一部たるを切實に感得せしむ。著者は文壇の宿將なり、文章明暢流麗、由來乾燥なる題目を美化して宛然一個の文學を成し、一讀忽ち再讀を促し、多趣味の中に多智識に臻らしむ。眞に稀有の名著たり。

布裝全一冊 定價金參圓五拾錢 送料金拾貳錢

『伊太利亞は人年若うして訪ふ可き國』と獨逸の哲學者は言へり。著者此國に遊ぶ事六箇月、其の感ずる所、包まず錄して本書をなす。筆は文藝、宗教、美術に始りて哲學、政治、科學に及ぶ、之を貫けるは西歐文化に對する透徹せる理解にして、之を彩れるは伊太利亞に對する燃ゆるが如き憧憬なり。弊館深き自信を以て之を江湖の識者に紹介す。

布裝全一冊 定價金貳圓 送料金貳拾錢

神戶高等商業學校教授 中川靜著

書翰文精義

著者中川教授は信書文學に沒頭せらるゝこと十有餘年、而してその多年の研究は此二大册を完成せり。上卷には各種信書の組織、並に各局部・新舊樣式・語句用法・慣用語彙・立案手續・整理法・電報に關して通俗的の解說を與へ、下卷は季節・問候・通告・人事・金品・要請・會同の七門を經とし、親交・社交・商務・公務の四性を緯とし、更に之を三十九種に分てり。眞に書翰文精義の名に副ふの名著たり。

布裝全二冊 定價各金三圓八十錢 送料金拾八錢

東京高等師範學校講師 日下部重太郎著

日本ローマ字文法

著者は我邦に於けるローマ字界の權威たり。曩に「ローマ字文典」を著し、多大の好評を博したるが、今や時代の新なる要求に應み、前著に大改訂を加へ、面目を一新し、名を實に副はしめて本書を公にせり。凡そローマ字に關する巨細を知らんと欲するの士は必ず本書に依らざるべからず。國語國字問題に留意せらるゝの士は速に一本を求めざるべからず。

布裝全一冊 定價金壹圓三拾錢 送料金八錢

エトクA47

東京寶文館發行書目

賜天覽台覽

故侯爵大隈重信著

文部省檢定濟

改訂 國民讀本

本書は故大隈侯爵の著にして實に現代國民必讀の寶典戸々必備の什寶なり。改訂國民讀本は曩に公にせられたる國民讀本に大改訂を加へられ大正新時代の要求に副はしめたるもの、國民小讀本は前者より稍低き程度の讀物にして少年必讀の著たり。孰れも文部省の檢定を經たれば、各學校各家庭に於て安心して採用するを得べし。本書發行以來已に一百萬部を賣り、需要今に至るまで續々として絶えず、實に故侯爵の偉大なる人格と共に本書の價値は永久不變と謂ふべし、改訂國民讀本は別に縮刷本あり。定價四拾五錢にして携帶至便なり。

和裝全一冊
定價金九十九錢
送料金八錢

國民小讀本

和裝全一冊
定價金七拾七錢
送料金六錢